

兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書



2012

神戸市教育委員会

正誤表

34頁 図52につきまして、本図に訂正をお願いいたします。

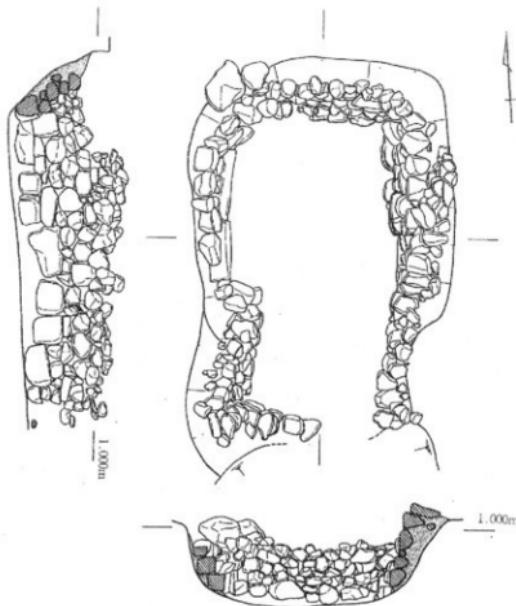


図52 SK602平面・立面図

0 2m

序

兵庫津は、大輪田泊と呼ばれた古来より国内の海運はもとより外国との貿易の窓口として重要な役割を担ってきました。

そして、そこに暮らす人々は進取の気質に富んだ海外に開かれた町を創り上げ、この伝統は今日にいたるまで港町「コウベ」の良き伝統として引き継がれているようです。

このことは、発掘調査によって姿を現す密集した街並みや出土する豊富な遺物とっても窺い知ることができます。

今回ご報告する七宮町一帯は、江戸時代には有力な商家が軒を並べる兵庫津の経済の中心地であったといわれています。

本書が地域の歴史を知っていただくための一助となり、文化財の保護に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、本調査が関係者および地域住民のみなさまの多大なるご理解とご協力によって、実施することができましたことを厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市兵庫区七宮町2丁目1番2において、平成22年度に発掘調査を実施した、兵庫津遺跡第53次調査の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は、サムティ㈱および奥村組土木興業㈱の委託を受けて神戸市教育委員会が実施した。
3. 現地での調査期間は、平成22年10月12日から平成23年2月4日まで神戸市教育委員会文化財課の内藤俊哉・井尻裕が担当した。現地調査終了後から平成23年度にかけて神戸市埋蔵文化財センターにおいて出土遺物の整理作業および報告書の作成をおこなった。報告書作成については調査担当者に加え文化財課の浅谷誠吾・中村大介が担当した。
4. 本書写真図版のうち現地での遺構写真は調査担当者によるもので、航空写真は懇アコードによる。遺物写真については杉本和樹（西大寺フォト）、また出土遺物の顕微鏡写真については文化財課中村大介によるものである。
5. 本書の記述については、目次に執筆者を記し記載のない部分については内藤が担当した。「第3章第1節」の、動物遺存体の分析については独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 丸山真史氏、「同章第2節」の出土人骨についての分析については奈良県立橿原考古学研究所 大藏山美子氏よりそれぞれ正稿を賜った。記して感謝いたします。
6. 出土した陶磁器類については、堺市立泉北すえむら資料館 森村健一氏に、また墨書き上器については、神戸市立博物館 小野田一幸・高久智広両氏に御教示頂いた。記して感謝いたします。
7. 本書に使用した標高は東京湾平均海水面（T.P.）を、方位座標については世界測地系第V系座標を使用している。
8. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「神戸主部」「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の1の地形図「神戸駅」「兵庫」を使用した。
9. 発掘調査で出土した遺物および図面・写真等の記録類は、神戸市教育委員会において保管している。
10. 現地の発掘調査の実施ならびに本書の刊行については、サムティ㈱および奥村組土木興業㈱の多大なご協力を得た。

調査組織

発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導を得て実施した。それぞれの調査組織は、以下のとおりである。

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）

工樂 普通 大阪府立铁山池博物館長

和田 晴吾 立命館大学 文学部教授

教育委員会事務局

現地調査（平成22年度）・遺物整理（平成23年度）

調査組織表

	平成22年度	平成23年度
教育長	橋口秀志	永井秀憲
社会教育部長	大寺直秀	大寺直秀
社会教育部参事 (文化財課長事務取扱)	柏木一孝	安達宏二
社会教育部主幹	渡辺伸行 (神戸市埋蔵文化財センター所長事務取扱)	千種 浩 (埋蔵文化財係長事務取扱)
埋蔵文化財指導係長	丸山 肇	
埋蔵文化財調査係長	千種 浩	
専門役		丸山 肇
文化財課主査	丹治康明・安田 滋・斎木 嶽	丹治康明・安田 滋 斎木 嶽
事務担当学芸員	佐伯二郎	佐伯二郎・中谷 正 井尻 格・小林さやか
埋蔵文化財センター担当学芸員	黒田恭正・西岡誠司・山口英正	黒田恭正・西岡誠司 山口英正・阿部敦生
保存科学担当学芸員	中村大介	中村大介

目 次

序・例言

発掘調査組織・目次

第1章 はじめに	1	10. 第7遺構面	39
1. 調査の経緯と経過	(井尻・内藤) 1	11. 第8遺構面	44
2. 遺跡の位置と歴史環境	(井尻・内藤) 1	12. 第9遺構面	49
第2章 調査成果	3	13. 第10遺構面	54
1. 調査区の設定	3	14. 金属製品	(浅谷) 58
2. 基本層序	3	15. 炭化遺物	(中村) 66
3. 第1遺構面	4	16. 遺構の切り取り	(中村) 68
4. 焼土層	9	第3章 出土動物遺存体と人骨	69
5. 第2遺構面	10	1. 兵庫津遺跡第53次調査出土の動物遺存体	69
6. 第3遺構面	16	丸山真史(奈良文化財研究所)	
7. 第4遺構面	20	2. 兵庫津遺跡第53次調査出土の人骨	75
8. 第5遺構面	26	大藪由美子(奈良県立橿原考古学研究所)	
9. 第6遺構面	32	第4章 まとめ	77

付表(遺物観察表)

表紙写真(SK602出土遺物)裏表紙写真(SK903出土遺物)

第1章 はじめに

1. 調査の経緯と経過

兵庫津遺跡は現在までに52次にわたる調査が実施され、その結果、国内有数の港町の実態が明らかにされてきた。

今回の調査は、共同住宅建設事業に伴うものである。平成20年4月に試掘調査を実施して遺構が確認されたため、建設工事により地下の文化財に影響をあたえる部分約360m²について平成22年10月12日より発掘調査に入った。調査では、当初の予測を上回る10枚の遺構面を検出することとなった。順次、調査および記録を行った結果、平成23年2月4日に現地での調査は終了した。

2. 遺跡の位置と歴史環境

兵庫津遺跡は、神戸市中央部の海岸部に位置する古代から近世にかけての複合遺跡である。古くは「大輪田泊」と呼ばれる文献上にもたびたび登場する。とくに、平安時代後期に平清盛により経ヶ島が築造され日宋貿易の拠点とされたことは著名である。

中世になり兵庫（島）と呼ばれるようになってからも、寺社勢力の庇護のもとに瀬戸内海運の主要港として栄えた。また、室町時代前期には明との通商の窓口として整備され、「教言卿記」など当時の日記には、將軍足利義満の兵庫下向の記事がたびたび登場する。

その後、15世紀半ばに起こる応仁・文明の乱により港としての機能は一旦荒廃し、国際貿易港としての機能を堺に譲るとされている。しかし、近年の発掘調査の成果によって、この時期に兵庫津の町の衰退を裏付けるにたる資料はみつかっていない。

室町幕府の力が衰え戦乱の世になると、兵庫津は商品の流通といった経済的な面ばかりでなく、兵員や軍需物資の輸送などの兵站的な面からも戦国大名達によって着目されるようになり、有力な豪商が保護育成されていった。やがて天正8（1580）年に兵庫の町は織田信長方の軍勢による花熊城攻めの際に攻撃される。この後、兵庫津の町は織田・豊臣の勢力下のもとで、町の城郭化が進められた。現在の中央市場跡地周辺に兵庫城が築かれ、町を取り巻くように巡らされた都賀堤と堀割や遺跡の北西の寺町などはこの名残とされている。

また、慶長元（1596）年に発生した「慶長伏見地震」によって大きな被害を受けたことが当時の記録によって指摘されていたが、発掘調査によっても地震の痕跡が検出されている。その後、復興した近世の兵庫津は、当時の経済の中心地で大消費地でもあった大坂の外港としてだけでなく、西国との人の往来、物資の流通量の増加に伴って物資の集積地として、さらには西国街道の宿場町として発展を続け宝永8（1711）年には人口2万人をかぞえる国内でも有数の都市となる。

この少し前の元禄9（1696）年に作成された「摂州八部郡福原莊兵庫津絵図」は兵庫津を描いた現存する最古の絵図であり、現在の地図とも合致するほどの精度をもつものであり、兵庫津の町を研究する基礎資料となっている。

やがて幕末の慶応3（1867）年に兵庫（神戸）開港をむかえ、明治時代になると初代兵庫県庁が兵庫陣屋跡におかれるが、明治7（1874）年に新川運河の開削によって北西の3分の1ほどが削平され、現在はその姿を止めている。一方開港に伴って整備されていった遺跡東方に隣接する波止場や旧居留地の建物などの



図1 調査区周辺図

歴史的景観は、今なおミナト神戸のシンボルとなっている。

今回の調査区は、平成9年度に実施された第14次調査地の南(裏)に隣接する場所にある。同調査においては、近世の町屋群と共に伴う生活関連施設をはじめ中世の倉庫施設や土師器皿の集積遺構などが確認されている。

また、調査地の現在の住居表示は「七宮町」であるがこれは1970年代後半の区画整理等の事業によるもので、それ以前は、南側の街路を挟む区域を鍛冶屋町とする両側町の呼称が残されていた。「鍛冶屋町」の地名は文安2(1445)年の『兵庫北関入船納帳』にみられる「かちや辻子」にあたるとされる由緒ある地名であり、近世においては有力な商家が建ち並ぶ地域であったとされる。

周辺には、多くの遺跡が存在しているが、なかでも、兵庫津(大輪田泊)に関連するものとして、北に隣接して平安時代後期の「福原京」に関連すると考えられる大溝や建物群がみつかっている楠・荒田町遺跡や、さらに北には貴族の邸宅に伴う園池遺構の確認され、平氏一門の拠点とされたと伝えられる祇園遺跡や雪御所遺跡なども存在する。

主要参考文献

1. 兵庫津遺跡全般に関するもの

- 新修神戸市史編集委員会編『新修神戸市史 歴史編Ⅲ 近世』1992
神木哲男・崎山昌廣著『歴史海道のターミナル—兵庫の津の物語』
神戸新聞絆合出版センター 1996
歴史資料ネットワーク編『歴史のなかの神戸と平家 地域再生へのメッセージ』神戸新聞絆合出版センター 1999
藤田明良「中世における港町兵庫のあゆみ」『歴史と神戸』39巻2号 2000
大手前大学史学研究所「兵庫津の総合的研究—兵庫津研究の最新成果—」
2008
神戸市立博物館『特別展 よみがえる兵庫津—港湾都市の命脈をたどる—』
2004

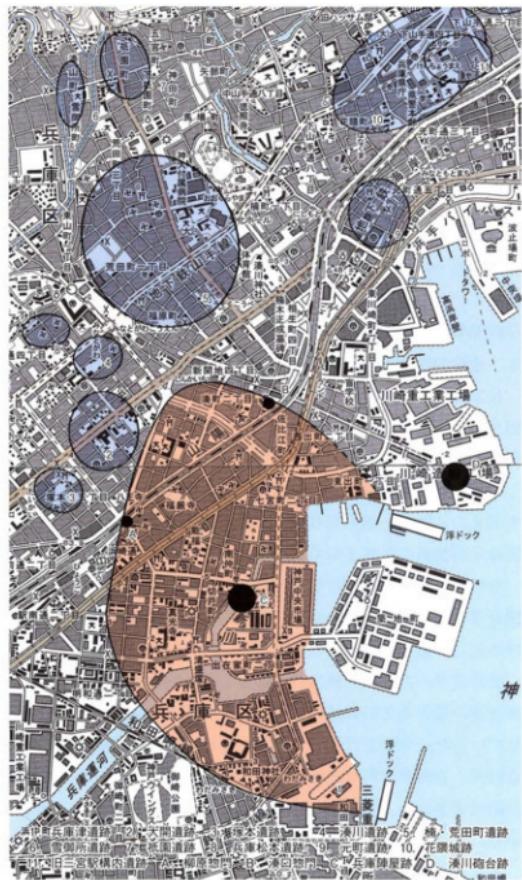


図2 兵庫津遺跡位置図 (S : 1 : 25,000)

2. 兵庫津遺跡の発掘調査成果 (主なもの)

- 兵庫県教育委員会「兵庫津遺跡－I」2001
兵庫県教育委員会「兵庫津遺跡－II」2004
大手前大学史学研究所オープンリサーチセンター「兵庫津遺跡－御崎本町地点
発掘調査報告書－」2006
神戸市教育委員会「兵庫津遺跡－第35次発掘調査概要－」2006
神戸市教育委員会「兵庫津遺跡第36次調査」2006
神戸市教育委員会「兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書」2008
神戸市教育委員会「兵庫津遺跡第45次発掘調査報告書」2008
神戸市教育委員会「兵庫津遺跡第14・20・21次発掘調査報告書」2010
神戸市教育委員会「兵庫津遺跡第50次発掘調査報告書」2010
神戸市教育委員会「兵庫津遺跡－第51次発掘調査報告書－」2010
神戸市教育委員会「兵庫津遺跡第52次発掘調査報告書」2011

このほか、神戸市教育委員会の実施した兵庫津遺跡の調査概要については、各年度刊行の『神戸市埋蔵文化財年報』に報告されている。

第2章 調査成果

1. 調査区の設定

調査区は、南側は現況道路面より約3.5m北に、北側は敷地の境界より8mほど入り、東西は敷地のはばいっぱいの南北12m、東西18mの長方形でさらに、北西よりの部分に4m四方の張り出した部分が付属する。便宜上、長方形の部分をI区北西の張り出した部分をII区としたが、本文中とくに記載のない場合はI区をさす。

なお、II区については工事による掘削深度の関係から第7遺構面までの調査に止めた。

2. 基本層序

調査区の基本層序は、地表面（T.P.3.1m）より表土、盛土下に旧表土があり、さらに乳灰白色砂が堆積し第1遺構面の基盤層である赤褐色の焼土層に至る。乳灰白色砂の上には部分的に黄灰色土がみられる。

第1遺構面の遺構一部の遺構は、この黄灰色土および乳灰白色砂をベースとしており、深度は概ねT.P.2.7~2.5mを測る。

焼土層は、火災により発生した焼土塊を多量に含んでおり火災直後の整地層と考えられる。この焼土層の下には、調査区の西及び中央から南東部分にかけて火災により焼失した建物の建築材などの炭化物層があり、第2遺構面となる。

第2遺構面は、町屋建物群の基盤となっており床部分では、薄く堆積する灰色土によって構成される。

以下、層厚30~40cmの整地土である盛土ならぬ「盛砂」黄灰色砂を挟んで淡茶褐色シルトの第3遺構面となる。なお調査区の東より3分の1ほどの部分においてはこの「盛砂」がほとんど認められず敷地に段差が設けられていたと考えられる。

第3~8遺構面の基盤層以下においては上面で確認されるような明確な砂による整地層は認められず、焼土の混じったブロック状の土を含む暗褐茶色~褐灰色の土がそれぞれ20~30cm堆積し、遺構面直上に部分的に焼土の堆積を伴い各遺構面となる。第5・6遺構面上では焼土や炭層による整地が顕著であった。

第9遺構面は、砂堆の上に堆積した中世の遺物を多く含む褐灰色シルトを基盤とする。さらに第10遺構面は、淡黃褐色砂の砂堆上で検出された遺構面でT.P.0.2m前後を測る。この高さではほぼ湧水点に達しているようで、遺構埋土を掘削すると内部には急速に湧水によって満たされる。

淡黃褐色層以下の堆積において遺構・遺物は確認されなかった。

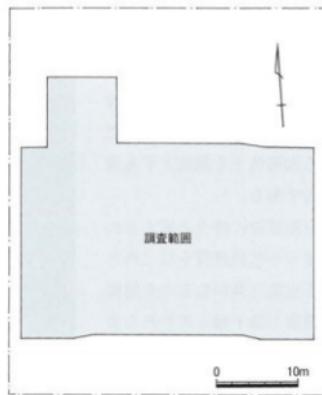


図3 調査区設定図



写真1 調査区断面（焼土層）

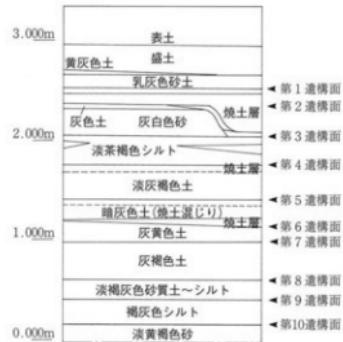


図4 調査区基本層序模式図 (S=1:50)

3. 第1遺構面

第1遺構面は表土および盛土、旧表土等の下に部分的に堆積する乳灰白色砂、およびその下層で調査区のほぼ全域を覆う焼土混じりの整地層である赤褐色土を基盤とする遺構面である。

町屋建物に伴うと考えられる礎石や埋桶遺構をはじめとする土坑、井戸などの生活関連遺構や地下蔵と思われる遺構などが確認された。



写真2 第1遺構面全景（南東より）

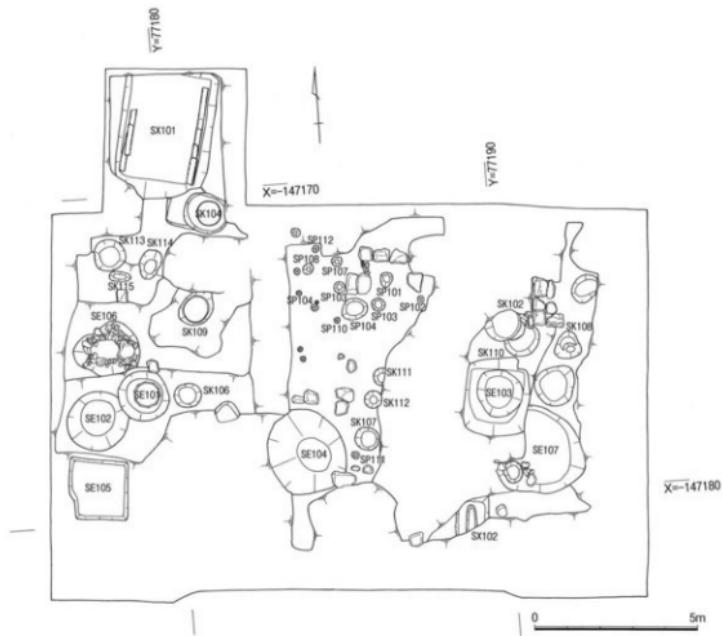


図5 第1遺構面平面図

町屋建物

調査区の中央部から東部において、調査地の南側に現存する街路に取り付くと考えられる町屋建物を3棟以上確認した。さらに調査区の西側においても確定できなかつたものの、残された礎石などから1～数棟の建物が存在したと考えられる。

SB101

調査区の中央、SB102の西に接する町屋建物である。南北6.5m以上、東西1.5mの規模で、調査区外の南側にさらに拡がる。礎石は、東壁面ではSB102の礎石と接するように据えられている。

SB102

SB101の東に隣接する町屋建物である。東西2.0m以上、南北9.0m以上で南および東側を搅乱により大きく削平されている。

SK104

調査区の北西に位置する径1.2m、深さ40cmの円形の掘形をもつ埋桶遺構である。断面は箱形で、平坦な底面の中央に径60cmの木桶の痕跡が僅かに認められた。

肥前系の磁器、瀬戸焼の皿などが出土している。

SK109

調査区西部の中央に位置する、長軸1.3m、短軸0.9m、深さ70cmの楕円形の掘形をもつ埋桶遺構である。

掘形の断面は逆台形で、平坦な底部の中央に桶を据えている。底板および東側の側板の痕跡が認められた。

桶の内部には魚骨を多く含んだ砂や砂礫が幾層も堆積しており、ゴミ穴として使用されていたと考えられる。



写真5 SK109



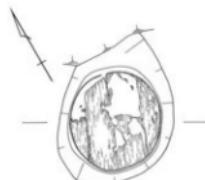
写真3 第1遺構面 町屋建物 (SB101)



写真4 SK104



図6 SK104出土遺物実測図



1. 淡灰褐色土
2. 淡灰黄色粗砂
3. 灰黄色砂質土
4. 暗灰黄色砂質土
5. 2層
6. 灰黑色シルト砂
(炭窯り)
7. 淡灰緑色砂質土
8. 淡灰褐色粗砂
9. 淡灰黄色粗砂
10. 淡灰綠色砂質土

図7 SK109平面・断面図

肥前系の磁器や瀬戸焼の皿、土師器の灯明皿、丹波焼や須佐唐津焼の擂鉢などが出土している。

SE101

調査区の西部に位置する。径1.5m、深さ2.2m以上の掘形をもつ円形の井戸である。SE102・SE106と切り合った関係にあり、一番新しい時期の構造である。

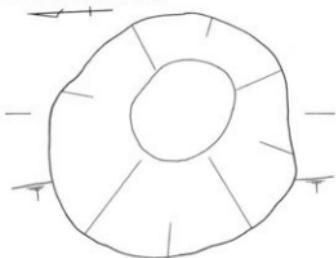
瓦製の井戸枠が使用されている。内径70cmで法量、縦25cm×横24cm、厚さ4.5cmの井戸枠専用の瓦10枚で1段を構成している。縦横の目地は、漆喰によって固定されている。

T.P. -0.2mまで掘削したが底は確認できなかった。

SE104

調査区の中央部に位置する径2.4m、深さ2.6mの掘形をもつ井戸である。内径は90~50cmで、中層以下では人頭大の石が多く入れられている。

井戸枠は確認されていないが、内部に漆喰の破片が多く投棄されていた。廃棄に際して瓦などの枠材を抜き取った可能性がある。



3.000m

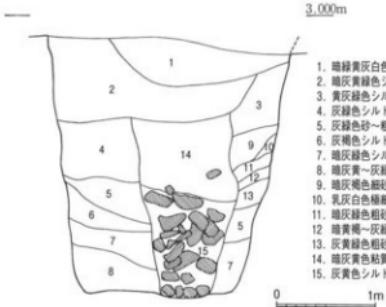


図8 SE104平面・断面図



写真6 SK109出土遺物



写真7 SE101



写真8 SE104

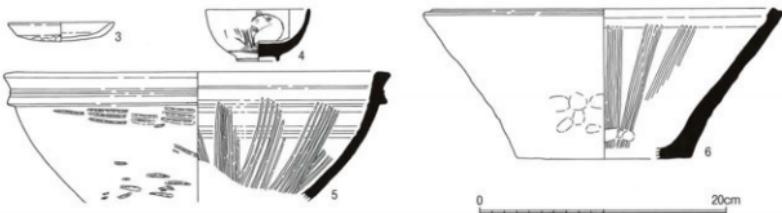


図9 SE104出土遺物実測図

SE106

調査区西部に位置する、長軸1.8m、短軸1.6m、深さ1.9mの歪な掘形をもつ井戸である。主に40cm前後の花崗岩の自然石が使用される石組みの井戸で、内径は径60cmほどである。

西側を攪乱により削平されている。内部には粘土や砂が互層になって堆積している。肥前系の陶磁器、土師器皿、須佐唐津の擂鉢などが出土している。



写真9 SE106

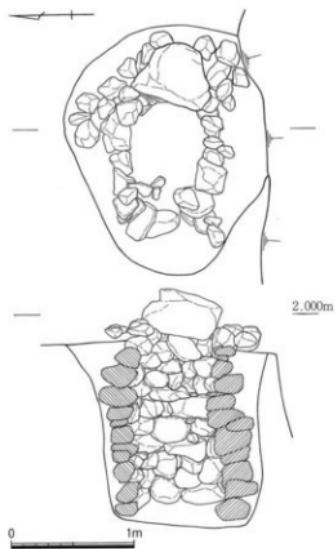


図10 SE106平面・立面図



写真10 SE104出土遺物



写真11 SE106出土遺物

SX101

調査区（Ⅱ区）の中央部に位置する、東西2.8m、南北3.6m以上、深さ1.6mを測る長方形の掘形をもつ地下式の施設である。内法は、南北2.9m、東西1.9m、の範囲で床面に東西方向の板材が敷かれている。板材は腐食が激しく、使われた枚数などは確認できなかったが、厚さ約2cmでところどころに金具（船釘）が打ち込まれていた。床板を固定するためのものか、転用された材に本来使用されていたものか不明である。

壁材には、幅17~24cm、高さ24cm前後、長さ1.2~1.8mの石材が積み重ねられて使用されている。東壁の南寄りで7段、西壁の北寄りで4段が残存していた。なお南および北壁では確認されなかった。石材は上面がカマボコ状に凸面をもち、底面はこれに合わせて凹面に加工され組み合わされている。



写真12 SX101出土遺物

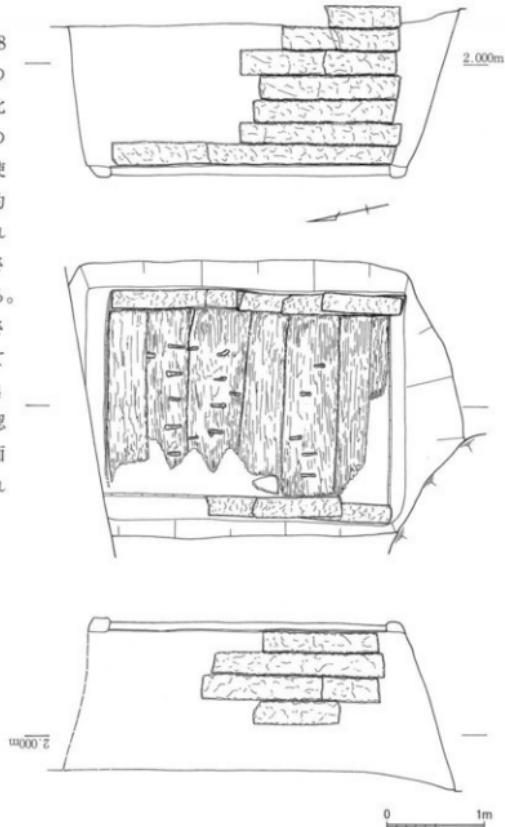


図11 SX101平面・立面図



写真13 SX101



写真14 SX101底面擗敷

4. 焼土層（宝永の大火）

調査区のほぼ全域を覆う炭や焼土塊の多量に含まれた層である。火災に伴う整地層と考えられる。ある程度整地できた段階で埋桶等の窪んだ部分を利用して瓦・焼土塊・炭化材などを集中的に投棄しているようである。このようにして形成された廃棄土坑が数ヶ所みられた。

SK201

調査区西部の中央部に位置する、東西2.4m、南北2.0m、深さ180cmの遺構である。焼土層の中ほどから火を受けた陶器類と共に焼土塊や瓦などが多量に投棄されている。

火事の後片付けに伴う廃棄遺構と考えられる。

SX205

調査区の北西部に位置する径1.2~1.4m、深さ70cmの土坑である。掘形は垂直にちかく底部は平らである。SK201と同様に瓦や焼土塊などが多量に投棄されており、廃棄遺構と考えられる。



写真15 SK201

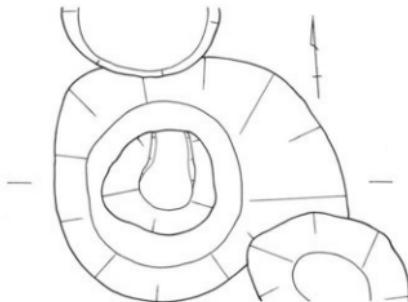


写真16 SK205

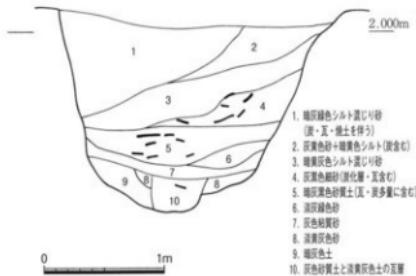


図12 SK201平面・断面図



写真17 SK201出土遺物

5. 第2遺構面

第2遺構面は、前述の焼土層の直下において確認された遺構面で、灰色土を基盤層とする。

火事に被災した町屋建物や蔵と共に伴う炉跡や土坑、石組遺構など多くの遺構が検出された。

遺構面は高温によって赤変したり、黒く煤けた部分が抜がり、上面には炭化物の堆積などもみられる。

周辺の調査においても確認されている宝永5（1708）年の大火の被災面と考えられる。



写真18 第2遺構面全景（空中写真）

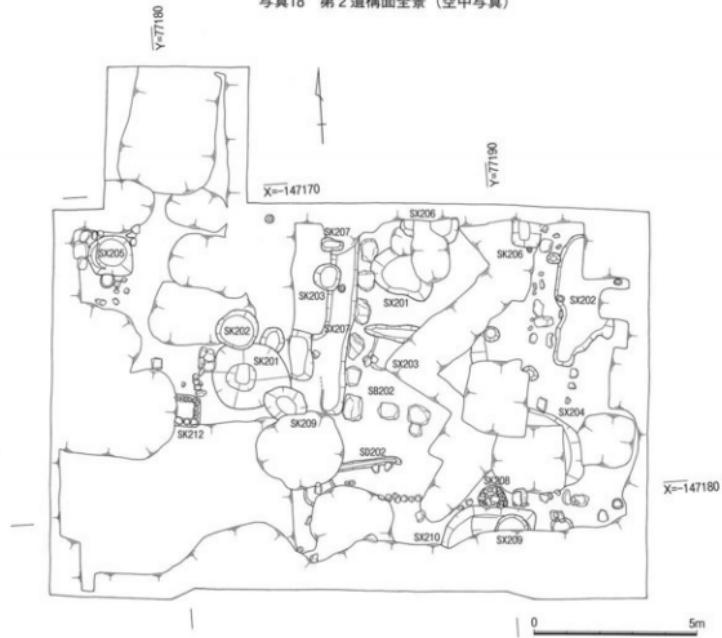


図13 第2遺構面平面図



写真19 第2遺構面 町屋群（東部）



写真20 第2遺構面 町屋群（西部）



写真21 第2遺構面全景（北東より）

焼土面

調査区の中央部から東にかけてと西端部分で火事によって焼け落ちた町屋の炭化物の堆積が層厚数cm認められる。炭化物には、柱材や板材などが含まれる。

調査区の一部では、炭化物層の上に20~30cmの火を受けた石が散在しているのが認められた。板葺き屋根に載せられた置き石であったと思われる。また焼けた壁材も多く出土したが、調査区の南東隅において出土した壁材は65×60cm、厚さ5~7cmのもので、比較的壁の構造等が特定できる破片であったため発泡ウレタンで梱包して取り上げた。(詳細は本章第16節)

町屋群

第1遺構面に続き町屋建物や倉庫と考えられる礎石建物が検出された。なお基本層序でも触れたとおり町屋が築かれる敷地は、調査区の東3分の1ほどを境として西側が約40cm嵩上げされた段が造られている。

SB202

調査区の中央部に位置する礎石建物である。東西2間、南北4間が確認された。北辺および西辺の礎石は後世の攪乱のため削平されたと思われる。

礎石は1m間隔で80×50×30cm程の大きな石が据えられ、部分的に間に脇に小さい石を並べている。検出状況から礎石の上面中央部の柱が乗る部分以外の礎石の大半は黄灰色粘土によって被覆されていたと考えられる。

SX207

SB201の西側の礎石列に接するように掘込まれた幅1.0m、深さ10~20cmの溝状の遺構である。掘形の壁は火を受けた痕跡は認められず、埋土には、焼けた瓦や炭化物が含まれるが、さらに火災の瓦礫を含む土坑SK203や207などによって切られている。火災後に礎石列を抜き取るために掘り込まれた可能性がある。



写真23 SB202



写真22 焼失壁材

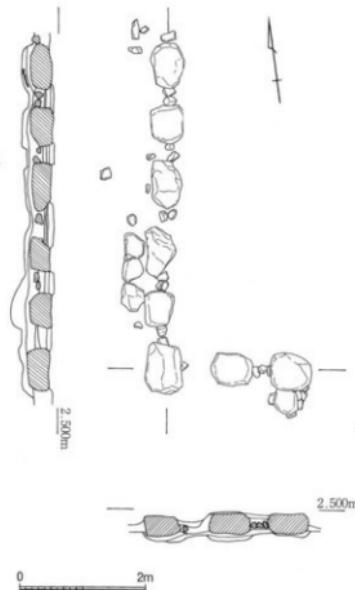


図14 SB202平面・断面図



写真24 SB202礎石（北より）



写真25 SB202礎石断面



写真26 SB202礎石（南より）



写真27 SK202

SK202

調査区中央部に位置する、径1.3m、深さ20cmのほぼ円形の土坑である。SK201に南側の一部を切られる。

埋土の上半層は、細かい炭や焼土が混じる砂で火災後の整地により入り込んだと考えられる。

掘形の周囲に沿って灰白色の砂の層がみられる。木桶などを据えていた痕跡の可能性がある。

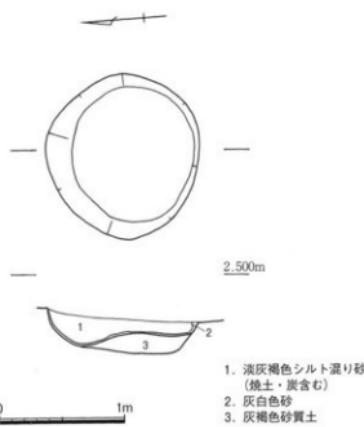


図15 SK202平面・断面図

SK208

調査区南東に位置する、径0.8m、深さ50cmの掘形をもつ石組遺構である。内法は40cmで、上から30cmくらいまで掘形に沿って自然石を3~4段積み上げて円形に囲んでいるが、南方向だけ平瓦を立てて塞いでいる。底部には平瓦の破片が散かれている。

この石開いの中には焼土や炭層が堆積しており形状から炉跡かと考えられる。

SK212

調査区の南西部に位置する、東西0.7m以上、南北1.0m、深さ25cmの掘形をもつ方形の石組遺構である。西辺を擾乱によって削平されている。

内法は東西55cm以上、南北55cmで、使用されている石は10~20cm程度の自然石で、2段分が並べられている。また南東隅部分からは土師質の焰烙が落ち込むような状態で出土した。

このほか、丹波焼の火入れ、土師皿なども出土した。

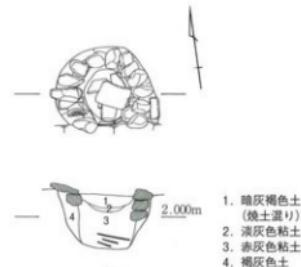


図16 SK208平面・断面図

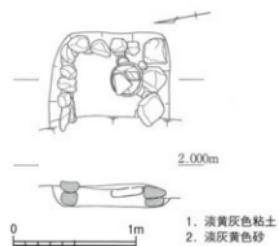


図17 SK212平面・断面図

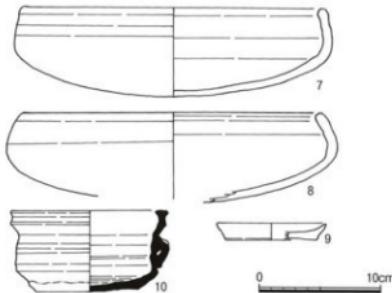


図18 SK212出土遺物実測図



写真28 SK208



写真29 SK212

SX201・SX203

ともに、SB201の中ほどにみられる浅い落込み上の土坑で埋土には焼土や炭が多く含まれていた。礎石などの抜き取り痕と考えられる。

SX206

調査区の北辺中央に位置する東西1.7m、南北0.8m以上、深さ30cmで調査区外の北に拡がる土坑である。上面から中央を攪乱によって大きく削平されている。埋土には焼けた瓦、焼土が多く含まれる。

墨書の認められる土師器皿と靖壺が出土した。靖壺には外面胴部に「〇」と斜線がみられ、土師皿には内面に経文などにみられる一節が確認できた。

SX209

調査区の南西端に位置する、東西2.1m、南北0.8m以上、深さ70cmの掘形をもつ埋桶遺構と考えられる。掘形の東寄りに径1.0mの円形で垂直に落ちる木桶と思われる痕跡が認められる。内部の埋土には、魚骨が多く含まれていた。

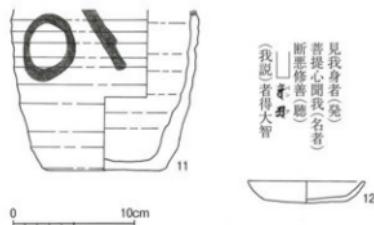


図19 SX206出土遺物実測図

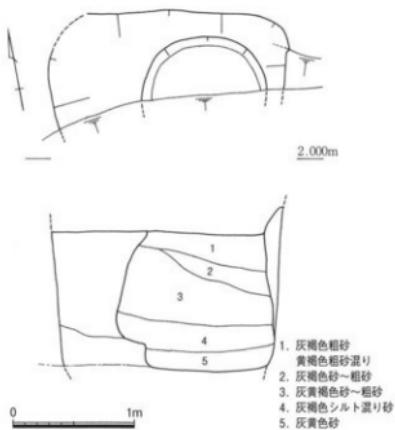


図20 SX209平面・断面図



写真30 SK212出土遺物



写真31 SX206出土遺物



写真32 SX209

6. 第3遺構面

第2遺構面下に堆積する盛土(砂)と考えられる白灰色砂等の下に存在する淡茶褐色シルトを基盤とする。

第1・2遺構面同様の町屋群とそれに付随すると考えられる土坑や集石遺構、石組遺構などが検出された。



写真33 第3遺構面全景（空中写真）

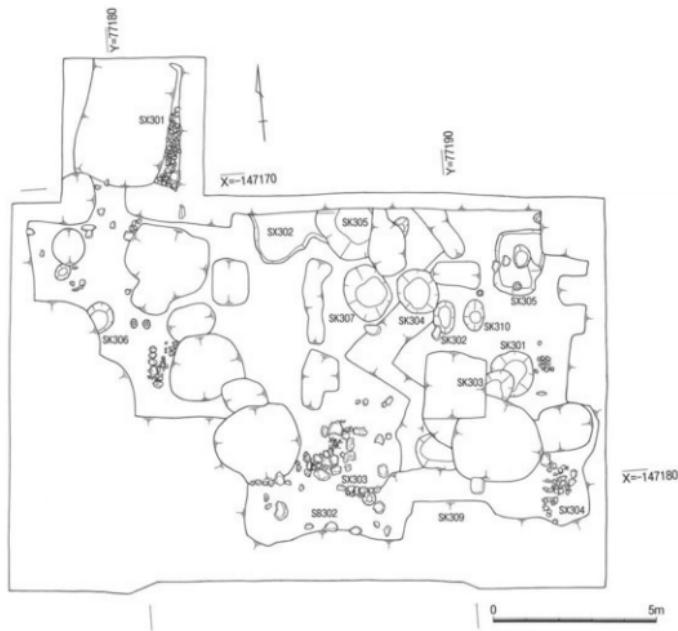


図21 第3遺構面平面図



写真34 第3遺構面全景
(北東より)



写真35 第3遺構面 司馬群



写真36 SX301



写真37 SX303



写真38 SX304

町屋群

調査区南部の西半分を中心として礎石列が認められる。2～3棟の建物が存在していたと考えられるが、個々の建物の規模を確定することはできなかった。

後述するSX301・303・304についても町屋建物の施設であると考えられる。

SK301

調査区中央部の東寄りに位置する東西1.2m、南北1.4m、深さ40cmの隅丸方形の土坑である。

埋土より土錘が多量に出土した。ほとんどが直径2.5～4.5cmの葉巻形をした土師質の管状土錘である。

SK304

調査区中央部の東寄りに位置する東西1.2m、南北1.3m、深さ50cmのやや楕円形の土坑である。北側の掘形部分で炭化した板材が出土している。

SK305

調査区の北辺沿いに位置する東西1.7m以上、南北1.5m以上、深さ45cmの土坑で東側約3分の1を攪乱によって削平され、北側約3分の1が調査区外に拡がる。中層に炭化材の堆積がみられた。

SK307

SX304の西隣に位置する、東西1.3m、南北1.7m、深さ40cmの土坑である。断面形は、台形で埋土の中層から下層にかけて厚さ10cmほどの炭化材を含む炭層が存在する。

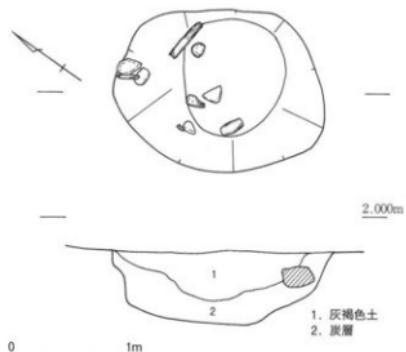


図22 SK307平面・断面図



写真39 SK301出土遺物



写真40 SK304



写真41 SK305



写真42 SK307

SK309

調査区の東に位置する、東西1.2m以上、南北1.0m以上、深さ20cmの土坑で東側および北側を搅乱によって削平されている。

唐津焼の大鉢をはじめ肥前系の陶磁器類が出土している。

SX301

調査区（II区）の東部分に位置する、集石遺構である。10~20cmの石がやや疊らに敷かれている。四方を搅乱によって削平されているために形状等は不明である。

SX303

SB302の南西隅において検出した集石遺構である。礎石で囲まれた50cm四方ほどの範囲に数~10cmの玉砂利が遺構面に薄く敷かれている。玉砂利は硬質の滑らかなもので色は白、暗青灰色、赤灰色、黄灰色が混じる。掘形は不明瞭である。また、周辺には焼けた石が散在する。

SX304

SB303の南において検出した集石遺構である。50×90cmの範囲に数~10cmの玉砂利が遺構面に薄く敷かれている。SX303と同様に玉砂利は硬質の滑らかなもので色は白、暗青灰色、黄灰色が混じる。

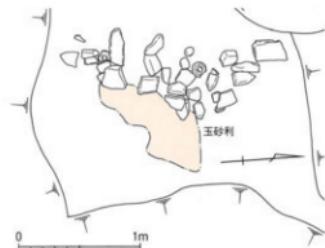


図25 SX304平面図



図26 SX304出土遺物実測図

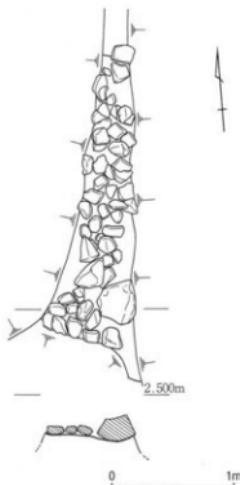


図23 SX301平面・断面図

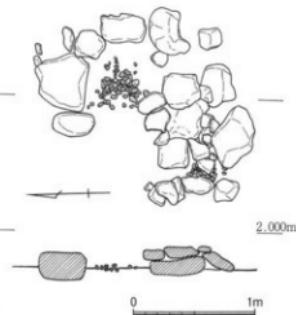


図24 SX303平面・断面図



写真43 SK307出土遺物



写真44 SK309出土遺物

7. 第4遺構面

第3遺構面の基盤層である淡茶褐色シルトと部分的に堆積する灰白色砂の下の淡灰褐色土を基盤層とする遺構面で、石組遺構、土坑などが検出された。

とくに調査区中央部においては、多くの土坑が切り合う土坑群が検出されている。

図27中網をかけた礎石はやや下層において検出された。



写真45 第4遺構面全景（空中写真）

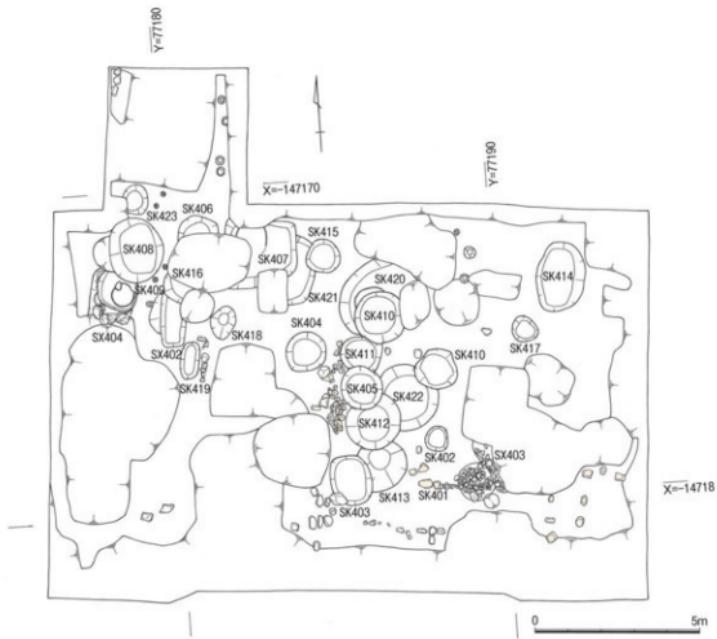


図27 第4遺構面平面図



写真46 第4遺構面全景
(北東より)

町屋建物

調査区の中央部より南側において町屋建物に伴うと考えられる礎石群が認められる。

礎石は、石列状に連なって並ぶ部分と一定間隔の柱間を持つ場合がある。複数の建物が存在するようであるが、攪乱等で削平され礎石が欠落しているところが多いために各建物の区切りや間取りは不明であるが、建物の方向は上面から踏襲されている町割りの方向に沿うものである。

南東部分においては、僅かな整地層を挟んで礎石が上下に重なるように検出されており、建替えが行われたことを窺わせる。

SK402

調査区の中央部に位置する東西0.6m、南北0.8m、深さ5cmの浅い土坑である。

漁労具の鍤と思われる鉄製品が多く出土した。この遺物については、本章第14節金属製品で説明する。

SK403

調査区の中央部に位置する土坑群のいちばん南に位置する。東西1.5m、南北1.2m、深さ15cmほどの楕円形の土坑である。

SK413を切り、検出された土坑群のなかでは比較的明瞭なプランをもつ。

埋土には、瓦や土器片に混じって板材と思われる破片が多く含まれていた。

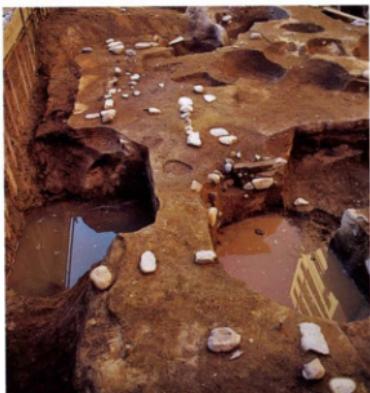


写真47 町屋建物



写真48 SK402

SK404

調査区の中央部に位置する、径1.2m、深さ15cmほどの円形の土坑である。埋土には土器に混じって石や板材の破片が含まれている。

SK405

調査区の中央部に位置する長軸1.2m、短軸1.4m、深さ25cmの土坑である。埋土には、瓦や木切れなどが含まれていた。砂目の唐津焼の皿、碗が出土している。

SK408

調査区西部の北西隅に位置する、東西1.3m、南北2.0m、深さ80cmの土坑である。

埋土の中層に厚さ数mmの炭層が認められる。南側で埋桶遺構SK409の掘形を切っている。

土師器の皿、焰烙、瓦質の火舎、肥前系の陶磁器などが出土している。



写真49 SK403



写真50 SK405

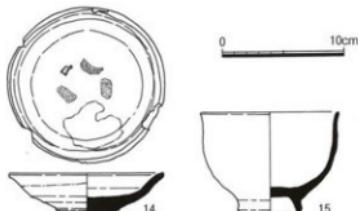


図28 405出土遺物実測図



写真51 SK408出土遺物

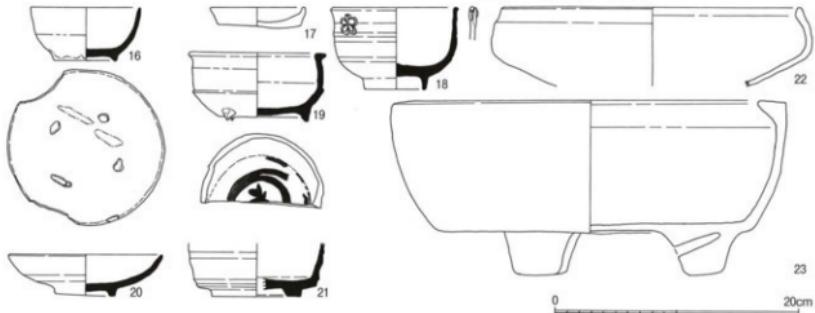


図29 SK408出土遺物実測図

SK409

調査区西部の中央に位置する、東西1.3m、南北1.0m以上、深さ40cmの埋桶遺構である。掘形のやや東寄りに内径65cm、残高20cmの木桶が据えられている。底板と側板の一部が残存していた。

固化した焼締めの壺24は、胎土は丹波焼に似るものとの器形等類例がみられないものである。

SK414

調査区の北東部に位置する東西1.5m、南北2.1m、深さ40cmの梢円形の土坑である。10~20cmの石が出土した。砂目をもつ唐津焼の皿や肥前系の磁器、丹波焼の擂鉢、火入れなどが出土している。



写真52 SK409出土遺物

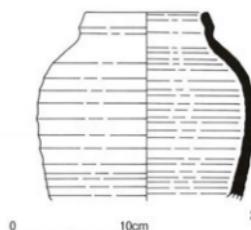


図31 SK409出土遺物実測図

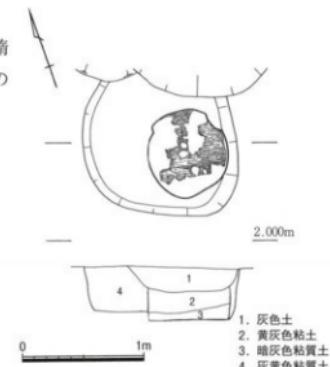


図30 SK409平面・断面図



写真53 SK409



写真54 SK409



写真55 SK414



写真56 SK414出土遺物

SK417

調査区の北東部に位置する、径0.8m、深さ20cmほどの土坑である。須佐唐津の擂鉢が出土している。

SK420

調査区中央部の北に位置する、長軸2.6m以上、短軸1.8m以上の橢円形の掘形をもつ埋桶遺構である。南西側をSK410と攪乱に北東側を攪乱によって削平されている。掘形の西寄りに径1.0mほどの桶を据えていた痕跡がみられる。

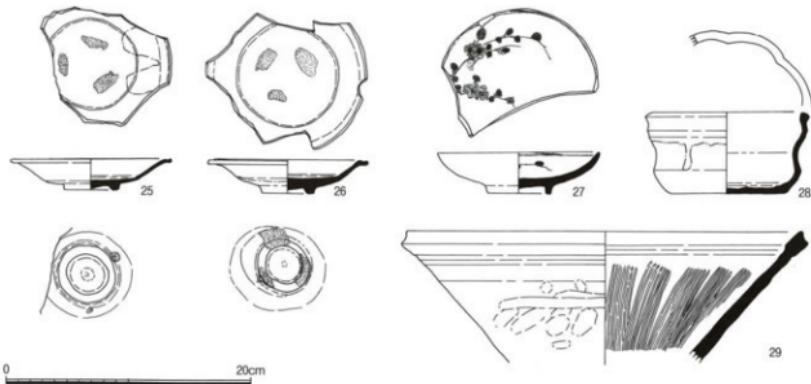


図32 SK414出土遺物実測図

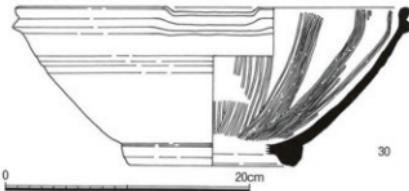


図33 SK417出土遺物実測図



写真57 SK417出土遺物



写真58 SK420



写真59 SK420出土遺物

SX401

調査区の南東に位置する集石遺構である。南北1.0m以上、東西1.2mの範囲で10~20cmの石がかたまって検出された。掘形は不明瞭で整地の途中で窪みをつくって石を埋め込んだようにみえる。

SX403

SX401の北に隣接する石組遺構である。北側の搅乱によって遺構の大半を削平されており、西辺の一部とその周囲の裏込めと思われる石のみが残されたようである。石組みは南北方向に、長さ35cm、高さ20cmの底石の上に延石状の石材2段が積まれている。高さはそれぞれ10cmで中段の石材は欠損しているが上段のものでは長さ80cmを測る。裏込めの石は10~20cmのものが多く軒丸瓦もみられた。

SX404

調査区の西に位置する、南北1.5m以上、東西1.3m、深さ65cmの掘形をもつ石組遺構である。内法は東西0.6m、南北1.0m、深さ60cmの長方形の石組みである。石組は東面の上段が崩れているものの10~60cmの石を中心として4段程度が積まれている。石積みは密であるがとくに面を取るなどの加工は施されていない。底部は素掘りのままである。

内部には、砂や粘土が堆積しており町屋建物に伴う貯蔵庫、ゴミ穴などの施設と考えられる。



写真60 SX403

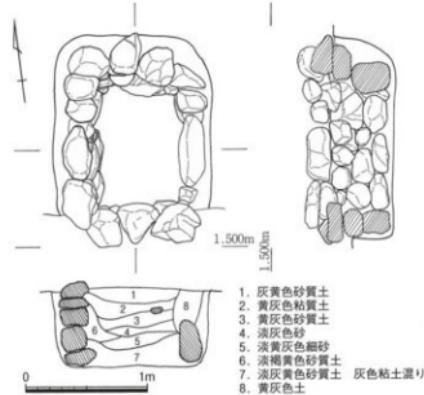


図34 SK404平面・断面図



写真61 SX404

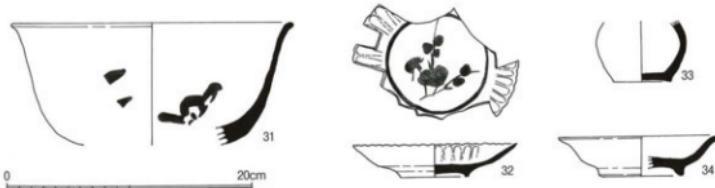


図35 SK420出土遺物実測図

8. 第5遺構面

第5遺構面は、焼土を含んだ暗灰色土を基盤とする遺構面で、T.P. 1.4m前後を測る。

礎石建物と共に伴う炉跡、土坑などが検出された。



写真 62第5遺構面全景（空中写真）

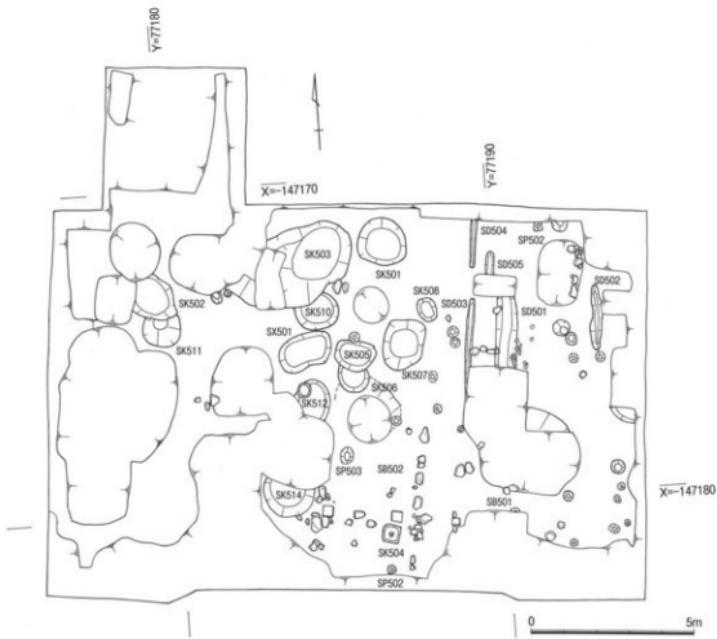


図36 第5遺構面平面図

町屋建物

調査区中央部の南半分を中心に礎石が確認された。とくに中央部の南端では、土間状の遺構がみられた。建物周辺の遺構面上においては遺物の出土が多く、唐津焼や美濃焼の碗や皿がみられる。図中38の土師器皿には内外面に墨書きがみられる。内面には「十二月卅（三十）日」「ふんこの國」などの文字が判読され、外面はほとんど摩滅しているもの人名が書かれていたようで、全体に何かの覚えを書きとめたようである。また40・41の唐津焼皿の高台内にも墨書きが認められた。

SB501

調査区中央部の南に位置する礎石建物である。東西4.0m、南北5.5m以上で東側に幅1.1mの土間状の遺構を伴う。

また南寄りの部分に部屋の仕切りと考えられる東西の礎石列が存在する。さらに南側の部屋には炉跡状の遺構SK504がある。

礎石は上下に重複して検出されているため補修や建替えが行われているようである。

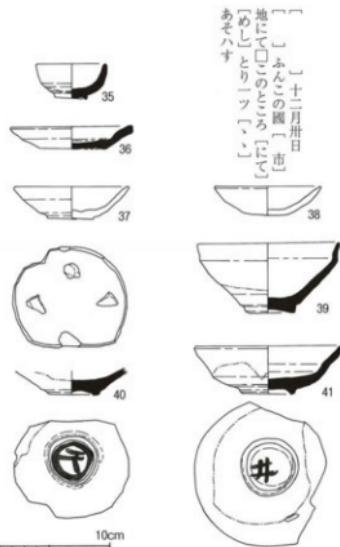


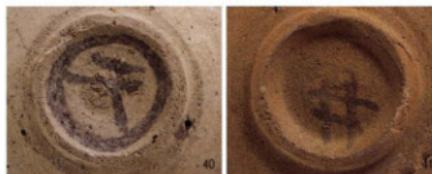
図37 第5遺構面出土遺物実測図



写真63 第5遺構面出土遺物



38



40

写真64 同（墨書き土器）



写真65 SB501

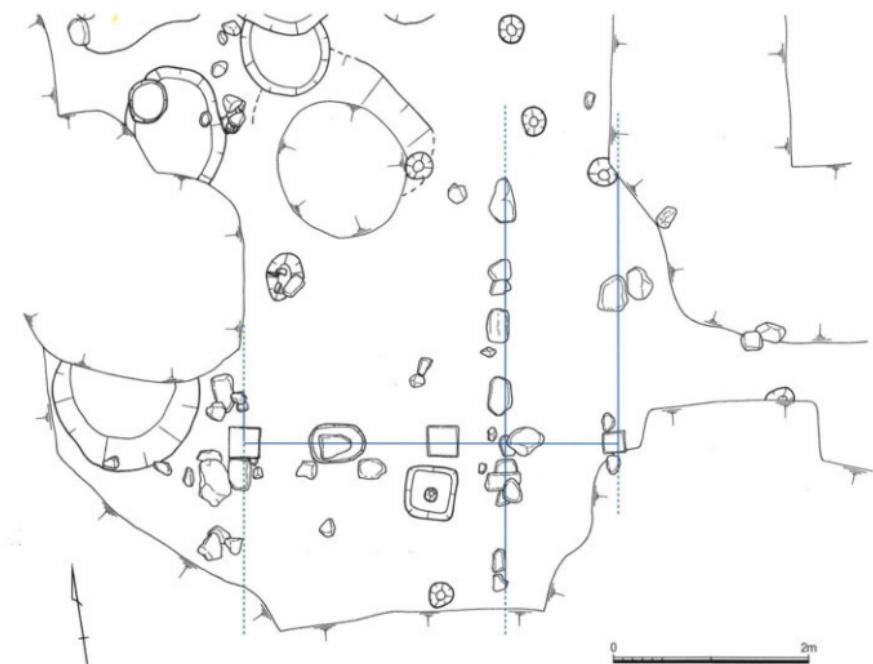


図38 SB501平面図



写真66 SB501転用礎石（五輪塔）

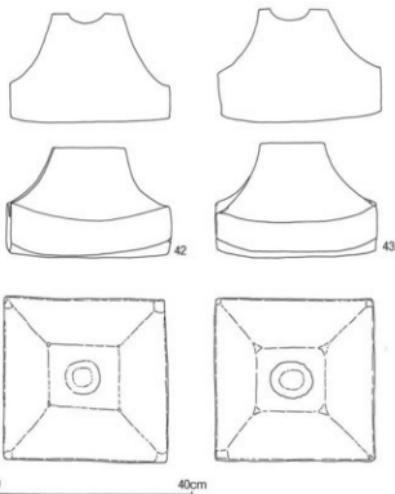


図39 SB501転用礎石実測図

SK504

調査区中央部の南に位置する、0.5m四方の土坑である。中央に径15cmの円形の窪みがある。遺構内には粘土が貼られ内部には焼土や炭が堆積する。SB501に伴う炉跡のような遺構と考えられる。

瓦質の羽釜が出土した。径9cmほどの小さいものでミニチュアと思われる。側面を上にして墨書の痕跡が認められた。「壺合ノ六分ニ也」と読め、土器の容積が110ccを測り、1合の6分=六勺(108cc)とも符合する。

SK501

調査区中央部の北に位置する東西1.5m、南北1.5m、深さ35cmの土坑である。断面形は、台形で底部は平らである。遺物はほとんど含まれない。

SK502

調査区の西部に位置する東西1.4m以上、南北1.2m、深さ50cmの土坑である。西側を擾乱によって削除されている。埋土に薄い炭層がみられ、SK511を切る。

SK503

SK501の西隣に位置する、東西3.0m以上、南北2.3m、深さ35cmの不整形の土坑である。

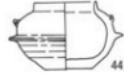


図40 SK504出土遺物実測図

写真68 SK504出土遺物



写真70 SK503



写真67 SK504



写真69 SK501

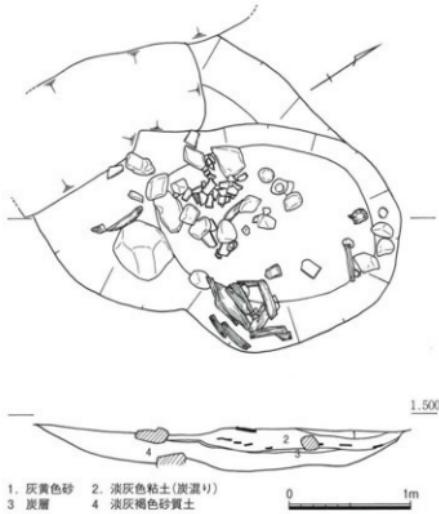


図41 SK503平面・断面図

西側を擾乱によって削平される。

埋土の上～中層で薄い板材や炭の堆積がみられる。

土師器の焙烙や皿、肥前系の陶磁器や備前、丹波、須佐唐津焼の擂鉢などが出土している。

SK510

調査区の中央部に位置する東西1.6m、南北1.3m以上、深さ20cmの楕円形の土坑である。北側をSK503によって削平されている。

埋土には、板材の破片が含まれていた。丹波焼の擂鉢などが出土した。

SK511

調査区の西部に位置する東西1.1m、南北0.8m以上の土坑である。深さ50cmで断面形は擂鉢状である。北側をSK502によって切られている。

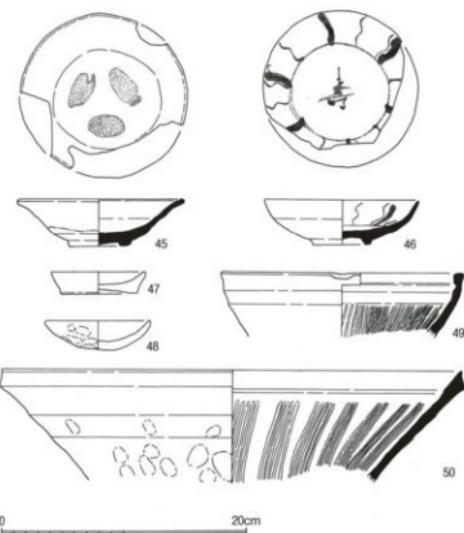


図42 SK503出土遺物実測図



写真71 SK503出土遺物



写真72 SK510



写真73 SK510出土遺物

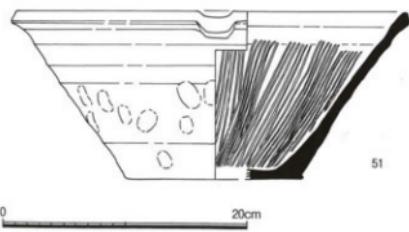


図43 SK510出土遺物実測図

遺構の壁面に沿うように、厚さ数cmの粘土層の堆積がみられる。

SK512

調査区中央部の南に位置する東西1.0m、南北1.2m以上の土坑である。南側を攪乱により削平されている。

唐津焼の皿が出土している。

SK513

調査区中央部の南に位置する浅い落込み状の遺構である。北側をSK506により、南側を攪乱によって削平されている。唐津焼の碗が出土している。

SK514

調査区中央部の南に位置する、径1.5mの円形の土坑である。攪乱により北側約3分の1を削平されている。断面形は台形で埋土の下層には、炭層がみられる。

SD503・504

調査区東部を南北にはしる幅20cm、深さ10cm前後の溝である。中ほどで途切れるが同一の遺構と考えられる。南側で検出されている町屋建物の土間状の痕跡と方向をそろえる。



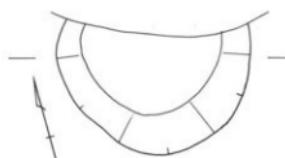
写真74 SK511



写真75 SK512・513出土遺物



図44 SK512・513出土遺物実測図



1. 乳灰白色砂
2. 淡黄褐色粘土
3. 暗灰褐色砂混りシルト
(崖・燒土含む)
4. 灰褐色シルト混り砂
5. 1層
6. 暗灰綠色シルト混り砂
7. 灰層
8. 暗灰黄色細砂
9. 暗灰色砂
10. 灰色粗細砂シルト
11. 暗灰色細砂シルト

図45 SK514平面・断面図



写真76 SK514

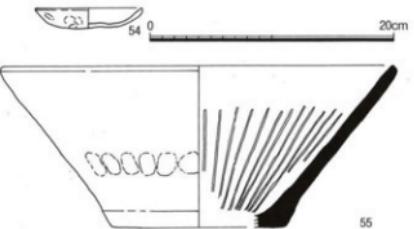


図46 SK514出土遺物実測図

9. 第6遺構面

第6遺構面は、灰黄色土を基盤層とする遺構面で石組遺構や集石遺構などが検出された。

固化した56・57の軒丸・軒平瓦は第6遺構面上の包含層から遺構面直上にかけて出土した。



写真77 第6遺構面全景（北東より）

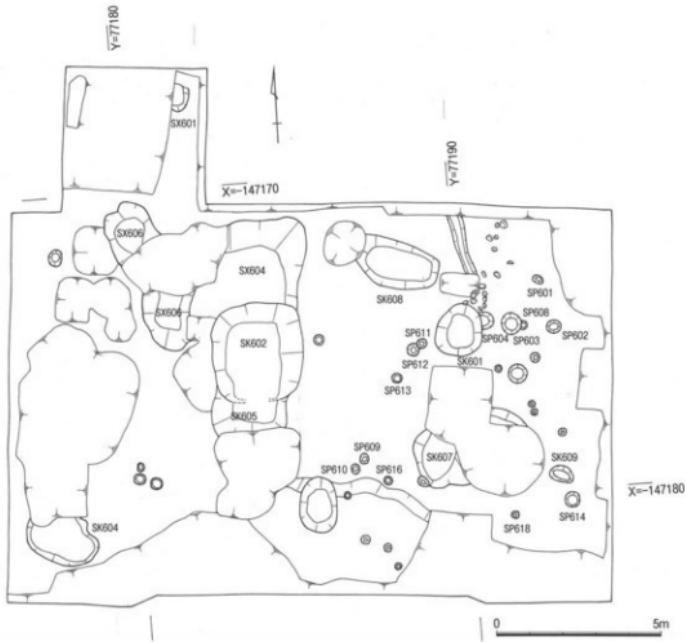


図47 第6遺構面平面図

SK601

調査区の東部に位置する東西1.4m、南北1.6m、深さ40cmの土坑である。埋土上層には、火を受けた痕跡のある15~20cmの石が多く含まれている。

SK602

調査区中央部に位置する、東西2.8m、南北3.1m以上、深さ110cmの掘形をもつ石組遺構である。西面および南面には改築の痕跡が認められる。

最終段階での内法は、底面で東西1.0m、南北1.7m、深さ1.0mを測る長方形で南辺の石組みはやや緩い勾配がつく。当初の規模は一回り大きく1.7m四方の正方形であったと考えられる。南に先行して造られた石組遺構SK605を拡張もしくは一部を利用して築いた可能性がある。

石組みは底部1~2段に大きな石を据え、その上に長さ20cm前後の石を中心として3~5段程度が積まれている。使用されている石材には、転用と思われる柱状のものや、石臼、五輪塔などが含まれていた。底部は素掘りのままでとくに加工はみられない。全体に下層の砂堆に達しており激しい湧水がみられる。

内部には砂や粘土が堆積し、下層からは完形の唐津焼の碗・皿や中国製青花碗・皿などが出土している。



図48 第6面上包含層~遺構面直上出土遺物実測図

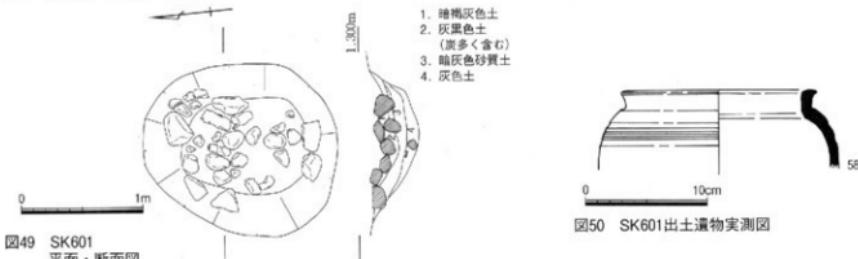


図49 SK601
平面・断面図

図50 SK601出土遺物実測図

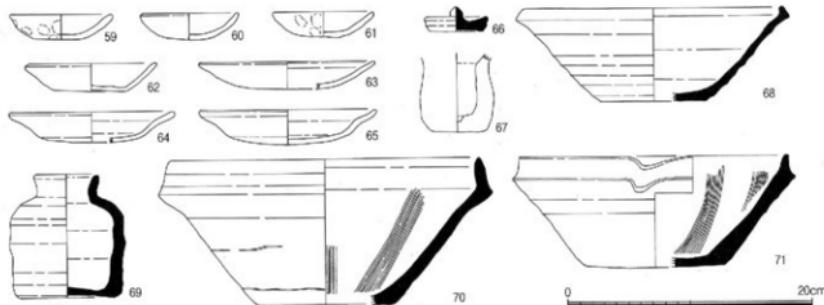


図51 SK602出土遺物実測図(1)



写真78 SK602・605

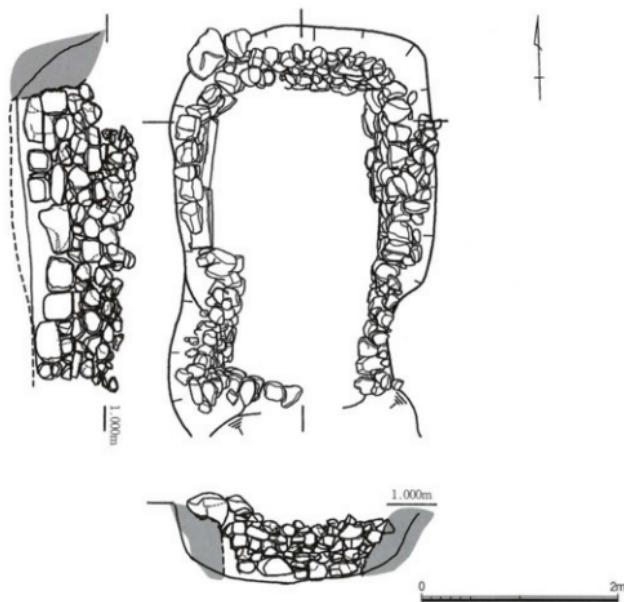


図52 SK602平面・立面図



写真79 SK602堆積状況



写真80 SK602遺物出土状況



写真81 SK602（改築後）



写真82 SK602（改築前）



写真83 SK602出土遺物(1)

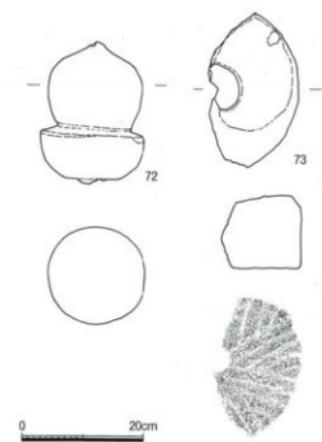


図53 SK602出土遺物実測図(2)

唐津焼の皿には胎土目のみられるものが多いが砂目をもつものも数点混じる。青花には、景德鎮、漳州窯産のものがある。やや古い時期の備前焼の描鉢や須恵器の鉢がみられるが、崩れこんだ裏込めの石に混入していた可能性がある。

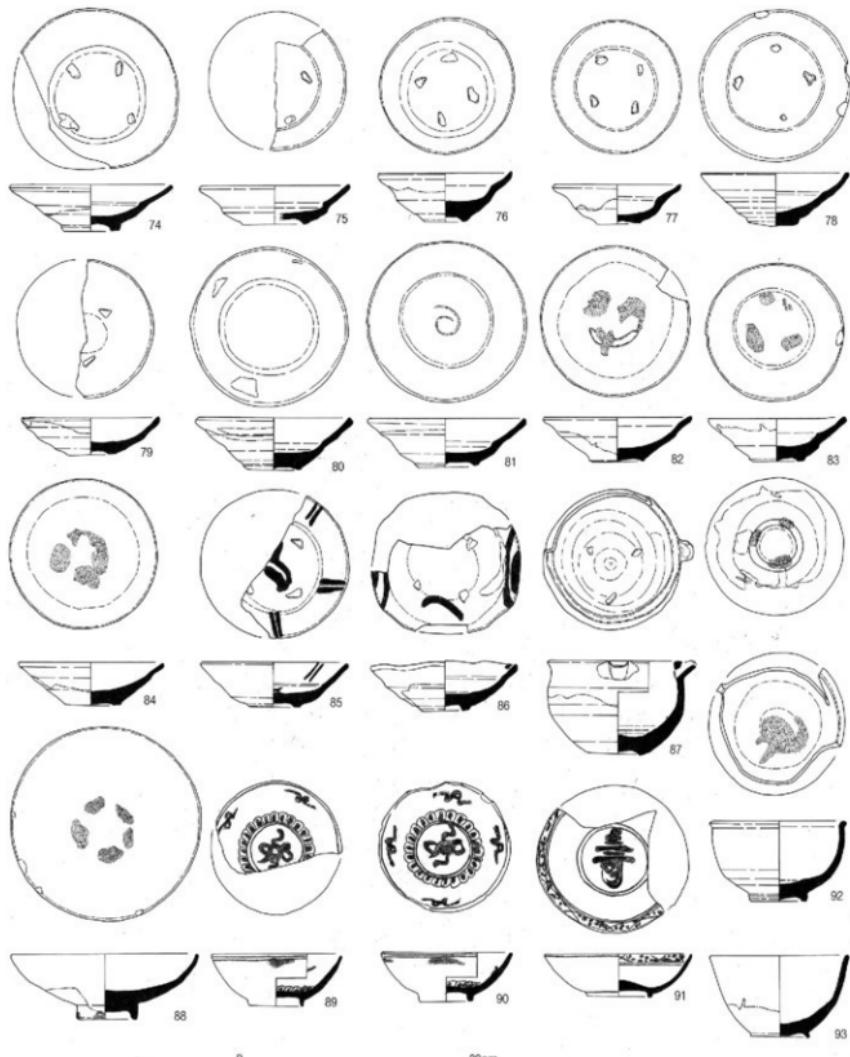


図54 SK602出土遺物実測図(3)



写真84 SK602出土遺物(2)

SK603

調査区中央部の南端に位置する、東西1.1m、南北1.6m、深さ35cmの楕円形の土坑である。

中ほどに径1.0mほどで丸く埋土の変わる部分がみられる。掘形は垂直にちかく底部は平坦で、縁には薄い砂層が認められる箇所もあることから、桶等の据えられていた痕跡と考えられる。

SK604

調査区の南西隅に位置する、東西2.2m、南北1.4m以上、深さ10cmの土坑で北側を擾乱によって削平されている。焼けた石や炭化物とともに骨が出土している。

SK605

前述のSK602の南に連なって検出された石組み遺構である。南側を擾乱によって削平されている。北側のSK602に先行すると考えられ、SK602の築造によって北側の石組を削平、一部再利用されている。

東西辺の一部と南西コーナー部を含む南辺の石組みの一部が確認できた。

砂目をもつ唐津焼の皿をはじめ、土師器の皿や熔块などが出土している。



図55 SK603出土遺物実測図

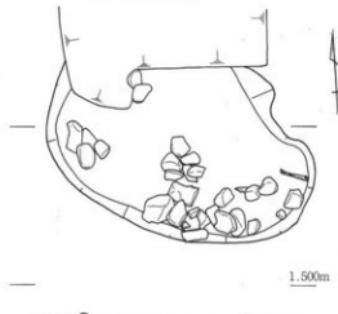


図56 SK604平面・断面図

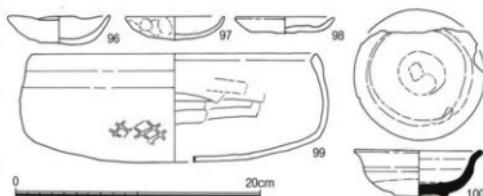


図57 SK605出土遺物実測図



写真85 SK603



写真86 SK604



写真87 SK605

10. 第7遺構面

第6遺構面より焼土塊を多く含んだ整地層を挟んで20~30cmほど下のT.P.1.0m前後で灰褐色土を基盤とする遺構面である。

パラス敷の礎石建物や埋葬遺構などが検出された。



写真88 第7遺構面全景（空中写真）

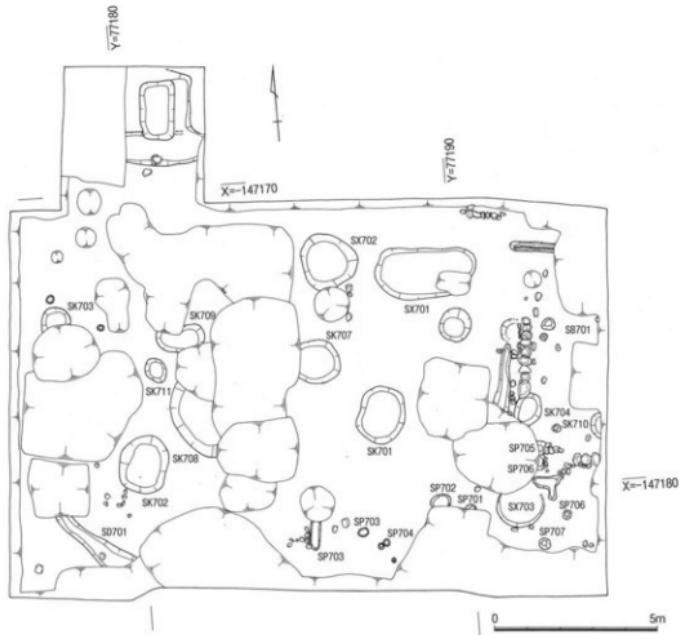


図58 第7遺構面平面図



写真89 第7遺構面全景（北東より）

SB701

調査区東部の西に位置する、礎石建物である。南北6.0m、東西2.7m以上の規模で、西辺に幅20~30cmの平らな石を用いた石列を中心に脇に小振りの石を使用した石列を伴い、また内部にも間隔をあけて礎石を配置し、その間をバラス状の小砾で覆う構造をとる。

また、北辺にあたる部分に幅25cm、深さ45cmの溝状の掘形で埠が貼られている。東側を擾乱によって削平されている。埠は23cm×34cm、厚さ2.5cmで5枚分確認された。この遺構については、密集した並行する礎石列や土台部分へのバラスの敷き込みなど通常の礎石建物とは違う特異な構造をもっている。礎石列は加重に耐えるため、バラス敷きは防湿の効果を期待したものと思われ、倉庫施設ではなかったかと考えられる。

なお類似の構造をもつ遺構は、隣接する第14次調査をはじめ平成9年度に実施された県教委による調査においても確認されている。

SD701

SB701の西辺に沿ってはしる幅20~45cm、深さ5~15cmの溝である。北方向に浅くなっているSB701の3分の2くらいで無くなる。

建物の側溝、もしくは礎石列の掘形の可能性がある。



図59 SB701平面・断面図



写真90 SB701



写真91 SB701礎敷き状況



写真93 SB701塼列



写真92 SB701礎石

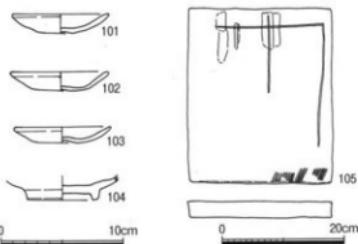


図60 SB701出土遺物実測図



写真94 SB701出土遺物

SB702

SB701の北側で調査区の北壁に沿って同様の石列が東西1.5m分検出された。長さ20cm 前後の石を接して並べている。調査区内では、この石列に伴うと考えられるバラスや粘土などは確認されなかった。

SK701

調査区の中央部に位置する、東西1.4m、南北1.8m、深さ90cmの楕円形の集石遺構である。断面形は逆台形となり底部は平である。掘形内には、長さ10~30cmの自然石が密に充填されている。土器などの遺物はあまり含まれていない。

青磁碗や土師器皿、瓦器皿および備前焼の擂鉢、小壺をはじめ土師質の鍋などが出土した。



図61 SB702平面・断面図



写真95 SB702



写真96 SK701



写真97 SK701出土遺物

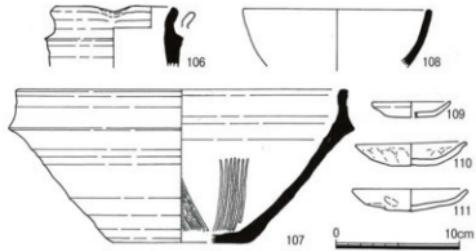


図63 SK701出土遺物実測図

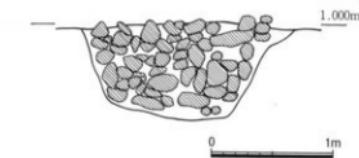
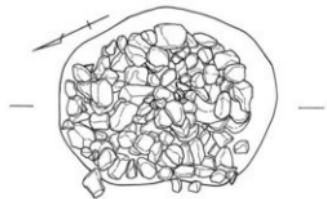


図62 SK701平面・断面図

SK704

調査区の東部に位置する、東西0.8m、南北1.0m、深さ20cmの土坑である。SB701の石列およびバラス層を切っている。埋土には焼土が含まれる。

SK707

調査区の中央部に位置する、東西1.2m以上、南北90cm、深さ15cmの土坑である。西側を攪乱によって削平されている。

SK708

調査区の中央部の西よりに位置する、東西1.3m以上、南北2.3m、深さ25cm以上の土坑である。南北および東側の3方を攪乱によって削平される。

図化したものは、タタキをもつ土師質の焰焰タイプの鍋である。

SK710

調査区の東壁の南寄りの部分に位置する径1.0m、深さ90cmの埋甕遺構である。

SB701を切っているようであるが、土留工事の際に東側3分の2および掘形の大半が削平されており疊敷きなどとの関係が不明確であるため確認を得ない。

甕は備前焼で口縁～頸部の大半が欠損する。

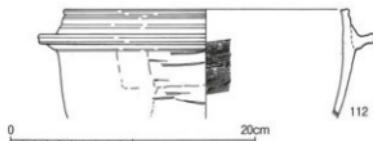


図64 SK707出土遺物実測図



写真98 SK708



写真98 SK708

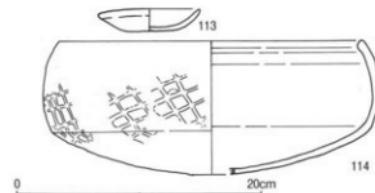


図65 SK708出土遺物実測図



図66 SK710出土遺物実測図

11. 第8遺構面

第7遺構面から焼土混じりの整地層を挟んでT.P. 0.6m前後で第8遺構面となる。この遺構面は、淡褐灰色砂質土～シルトを基盤層とする。

第7遺構面とよく似た構造をもつバラス敷の建物をはじめ石敷遺構、石組遺構などが検出された。

また、遺構面上の焼土混りの包含層からは人骨も出土している。詳細については第3章第2節で触れる。



写真100 第8遺構面全景（空中写真）

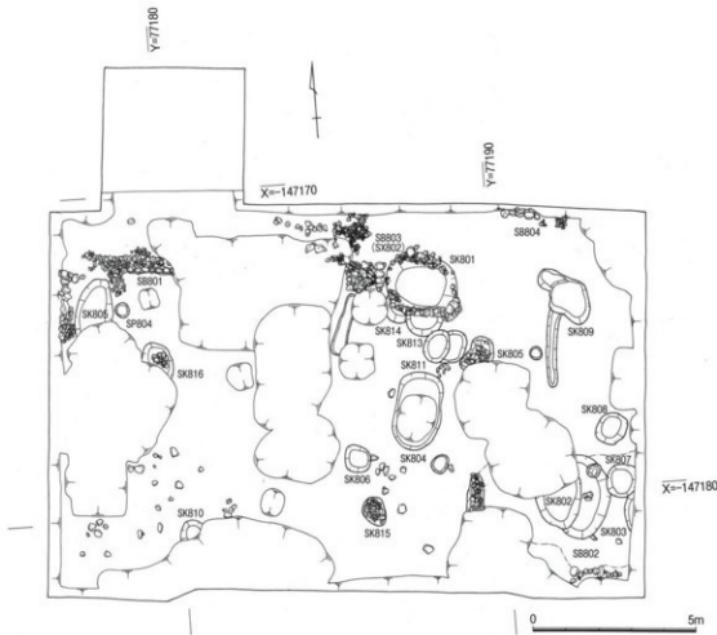


図67 第8遺構面平面図

第8面遺構面上包含層

第7遺構面のベースとなる焼土混りの灰褐色土層から第8遺構面直上にかけては、土師器、瓦質土器や備前・瀬戸美濃焼などの国内産土器に混じって中国製の青磁・白磁・染付などが多く出土している。瓦類も出土しており、軒丸瓦なども確認されている。

SB801

調査区の北西部に位置する石敷き遺構である。東西方向の石列は幅50cmで2.8m分を検出した。

南北両側にやや大きな石で外側に面を揃えた状態で並べ、その内側に拳大の石を組み込んでいる。また西側で南に曲がる南北方向は2.2m分を検出したが、東側面をSK805によって削平されているようである。

また東西方向の石列の中ほどに南に伸びる石列があるよう見られるが削平により判別し難い。

石敷きの掘形は深さ30cmほどの箱形でこの中に拳大の石が3段ほどにわたって積まれてバラス状の小石混りの粘土が詰められている。

建物とくに加重のかかる土蔵など倉庫施設の基礎であると考えられる。

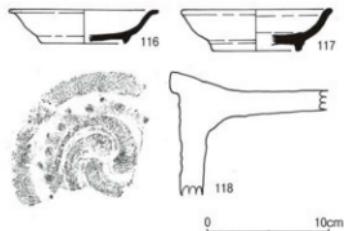


図68 第8面上包含層～遺構面直上出土遺物実測図



写真102 第8面上包含層～遺構面直上出土遺物（瓦）



写真101 第8面上包含層～遺構面直上出土遺物（中国製磁器）



写真103 SB801



図69 SB801平面・断面図

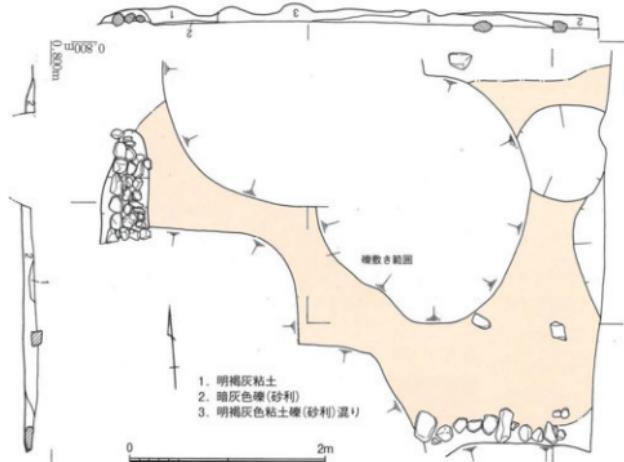


図70 SB802平面・断面図

SB802

調査区西部の南に位置する東西5.0m以上、南北3.6m以上の規模をもつ礎石建物と考えられる。

全体に削平を受け残りは悪いが、南辺および西辺の一部に礎石列が残る。西の礎石列はSB801同様、掘形内に石を3段ほど充填した構造をもっているつもので、建物の外側にあたる西辺に大きい石が並べられる。

また、南の礎石列は平な礎石の間を小振りの石で繋いでいる。また礎石列に囲まれた内側は1cm前後の細かいバラス混じりの粘土が厚さ10~15cmほど敷かれている。この上に礎石の可能性のある石が2個確認された。

SB803

調査区中央部の北端において検出された東西3.0m、南北2.3mほどの範囲をもつ石列・集石遺構である。

削平を受け中央で途切れ南北に分かれてしまっているが一連の遺構と考えられる。残りのよい南の一群では、東側面には礎石状の平たい大降りの石が接して5基並び、中ほどには、やや東に振った方向で面を合わせて並べた2列の石列もみられる。

北側では中ほどにやや小振りの礎石状の石列が認められるものの、あと集石については方向性がないよううにみられる。

バラス敷の礎石建物の一部と考えられる。



写真104 SB802

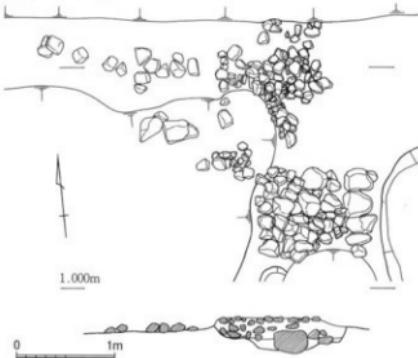


図71 SB803平面・断面図

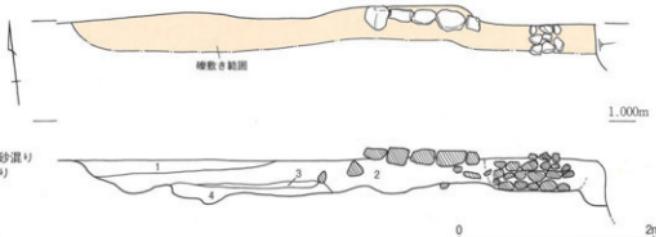


図72 SB804平面・断面図

SB804

調査区中央部の北辺部分で検出された石列遺構と共に伴うと考えられる細かいバラス敷の遺構である。

東は攪乱によって削平を受け北は調査区外に拡がる。

東側の南北方向の石列は、幅80cmほどで10cm前後の石が2～3段積まれている。この内側の東西方向の石列は長さ20～30cmの礎石状の石が並べれている。

バラス敷はこれらの石列を囲んで東西5.5m以上、南北0.5m以上、深さ30～40cmの規模をもつ。

SK801

調査区の北部に位置する東西2.1m、南北1.9m、深さ80cmの四角い掘形をもつ石組遺構である。

最終堆積には黄灰色砂の堆積がみられる。また北側の石組は内部に崩れ込んでいる。内法は東西1.6m、南北1.1mで、使用されている石は拳大の石が多く含まれ石組みも雑である。

SX802に接し、集石遺構SK813・814を切って築かれている。土師器皿や備前焼の捕鉢、中国製の青磁などが出土している。



写真106 SK801



写真105 SB804

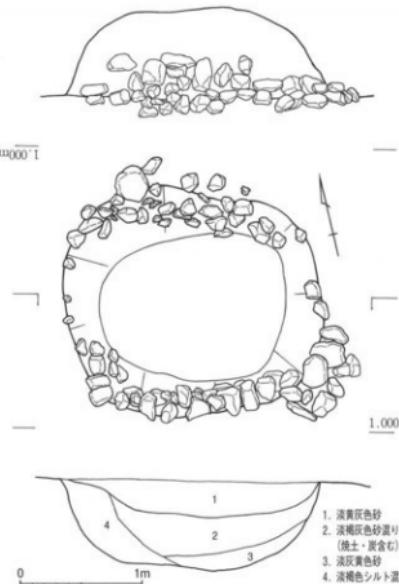


写真103 SK801平面・断面図

SK803

調査区の南東に位置する東西1.0m以上、南北2.5m、深さ40cmの楕円形の土坑である。西側半分ほどをSK802によって大きく削平されている。126の土師質の鍋が出土した。

SK810

調査区の南西に位置する東西0.7m、南北0.6m以上、深さ20cmの楕円形の土坑である。南東部分を攪乱によって大きく削平されている。埋土には焼土を多く含んでいる。

図化した土師器皿127・128や瓦質土器などが出土している。

SK813

SK801の南辺に切られる東西1.2m、南北1.0m以上、深さ60cmの土坑である。10~20cmの石がびっしり詰められていた。同様の集石遺構であるSK814の東側の掘形を一部切っている。

SK814

前述のとおり、北側をSK801、東側をSK813に切られる径1.0m、深さ60cmの土坑である。SK813と同様に掘形内には石が詰まっている。

SK815

調査区中央部の北側に位置する東西0.6m、南北0.9m、深さ30cmの土坑である。10~20cmの石が詰められている。

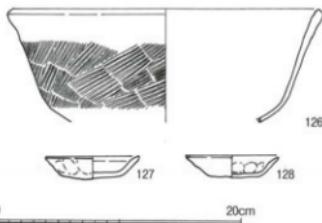


図75 SK803・810出土遺物実測図

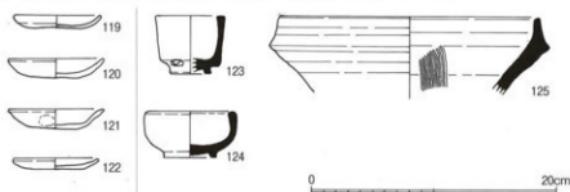


図74 SK801出土遺物実測図

写真107 SK801出土遺物



写真108 SK813・814



写真109 SK815

12. 第9遺構面

第9遺構面は、砂堆の上に溜まった褐灰色シルト層を基盤とする遺構面で、概ねT.P. 0.4mを測る。

埋堀遺構をはじめ集石土坑や礎石建物などを検出した。なお、遺構面より20cmほど下で湧水点となる。



写真110 第9遺構面全景（北東より）

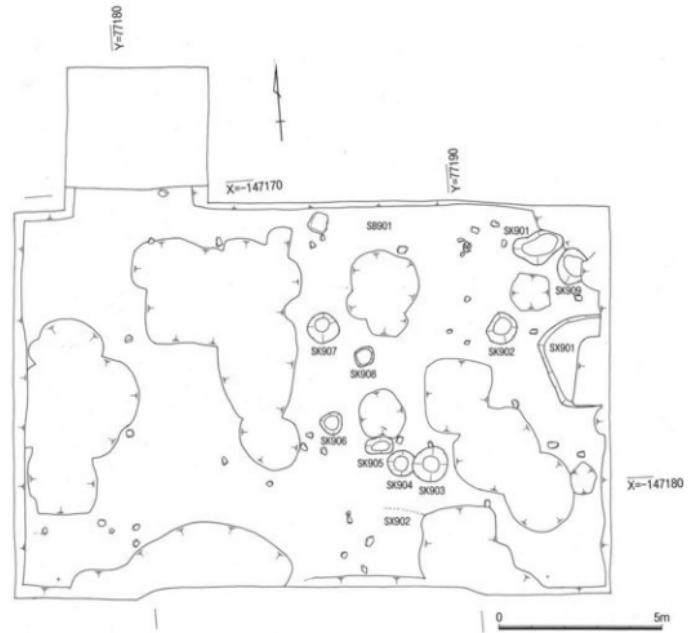


図76 第9遺構面平面図

第9遺構面上包含層～遺構面直上

遺構面上の包含層や遺構面においては、遺物が多く含まれる。上面に引き続き中国製の青磁や白磁が多く出土する。

SB901

調査区の北辺に沿って礎石列が認められる。建物の一部である可能性が高い。礎石は2.0～2.3m間隔で5基確認されている。

SK901

調査区北東隅に位置する東西1.5m、南北0.9m、深さ20cmの土坑である。拳大の礎が多く含まれている。青磁碗や石錘と思われる石製品が出土している。

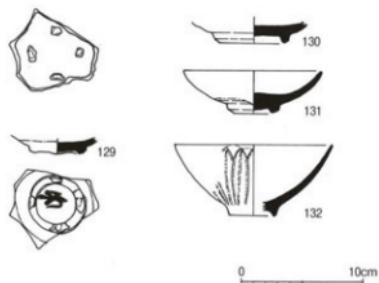


図77 第9面上包含層～遺構面直上出土遺物実測図



写真111 第9面上包含層～遺構面直上出土遺物（中国製磁器）



写真113 SK901出土遺物

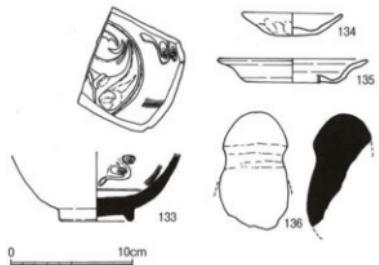


図78 SK901出土遺物実測図

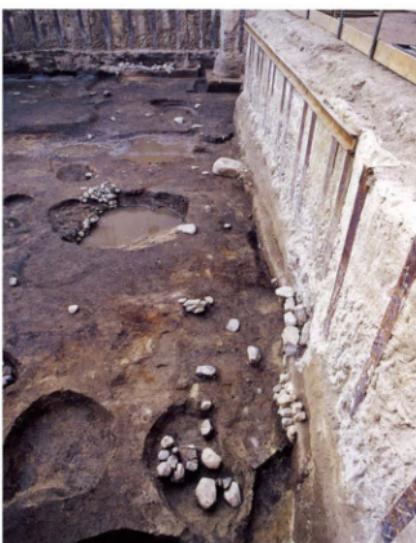


写真112 SB901（手前 SK901）

SK902

調査区西部に位置する東西0.9m、南北1.0m、深さ20cmの土坑である。埋土には、10~20cmの石が詰まっている。石は打ち割ったようなもの、火を受けた痕跡のあるものが含まれる。

土師器の皿が多く出土した。大小2タイプがみられる。

SK903

調査区西部の西端に位置する、埋壺遺構である。掘形は、径1.0m、深さ40cmの円形である。大型の壺が据えられている。上半部については削平のため欠損したと考えられる。同様の埋壺遺構であるSK904と東西に2基並んで検出された。深さ20cm位で湧水点に達するようで、調査時は常時滲水していた。

内部には焼土や炭混じりの土が入り込んでいる。また壺の内部から、土師器皿が多量に出土している。完形のものが多く一時に投棄されたものと考えられる。

土師器皿は、口径8cmと12cm程度のもの大小2タイプがある。

SK904

SK903の西に隣接する埋壺遺構である。掘形は、径80cm、深さ20cmの円形の土坑である。SK903と同様に壺が据えられていたようで、壺の破片が散在していた。



図79 SK902平面・断面図

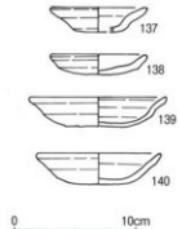


図80 SK902出土遺物実測図

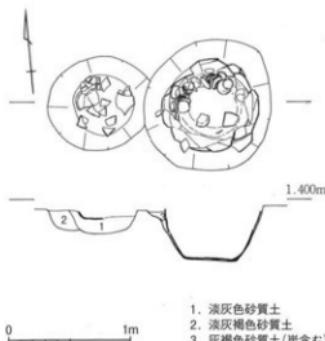


図81 SK903・904平面・断面図



写真114 SK902



写真115 SK903・904



写真116 SK903壺内部

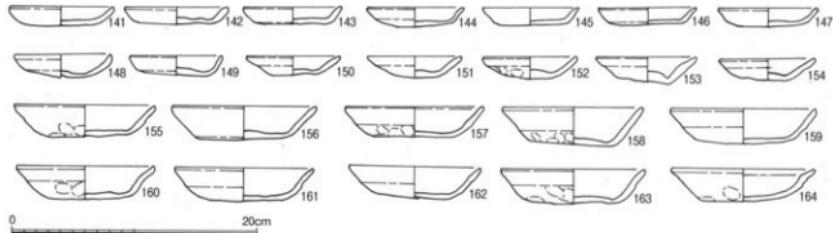


図82 SK903出土遺物実測図(1)



写真117 SK903出土遺物(1)



写真118 SK903出土遺物(2)

165

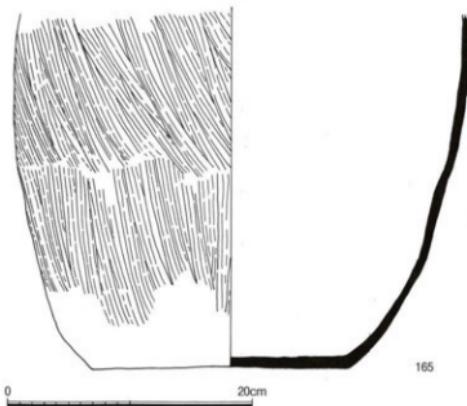


図83 SK903出土遺物実測図(2)

SK905

SK904のさらに西に隣接する東西0.8m、南北0.5m、深さ25cmの楕円形の土坑である。土師器の甕、皿、瓦質の羽釜などが出土している。

SK906

調査区中央部の南に位置する東西0.7m、南北0.6m、深さの30cmの土坑である。

上層にはSK902のように石が集められたよう投棄されており、下層には土師器皿が多く含まれていた。滑石製の石鍋も出土している。

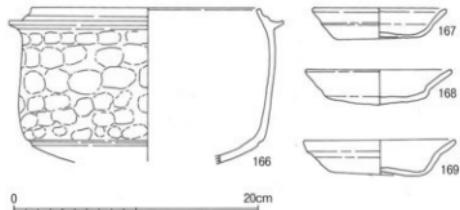


図84 SK905出土遺物実測図

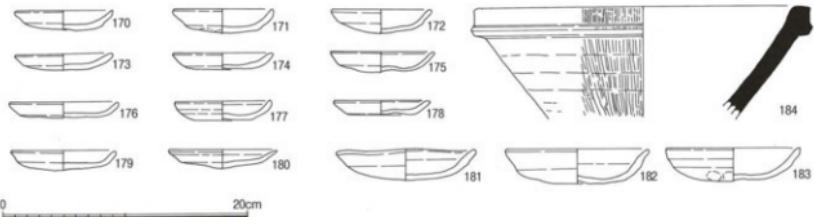


図85 SK906出土遺物実測図



写真119 SK905



写真120 SK905出土遺物



写真121 SK906



写真122 SK906出土遺物

13. 第10遺構面

淡黄褐色砂の砂堆上で検出された遺構面である。ベース面が砂層のため軟弱であり全体に遺構の残存悪く、調査区の北西側に向かって僅かに砂層が落ち込んでいく。なお、この遺構面より数cm下がると湧水点に達するため遺構の掘形が確認できなかった遺構もある。

またこれ以下の堆積において、トレンチ調査を実施したが遺構や遺物は確認されなかった。



写真123 第10遺構面全景（東部）



写真124 第10遺構面全景（西部）

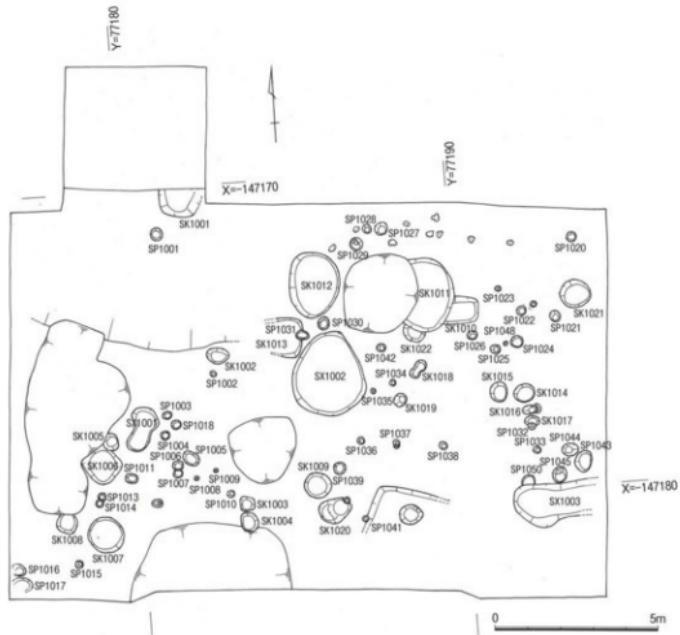


図86 第10遺構面平面図



図87 磐石列1001平面図

第10遺構面上包含層～遺構面直上

遺構面上およびその上を覆う遺物包含層である褐灰色シルトからは多量の遺物が出土している。土師器、須恵器、瓦質土器や備前焼など概ね14世紀代から15世紀初めの時期である。また中国製の青磁や白磁も含まれている。

土器群

包含層の掘削中、調査区の中央部の南において検出面よりやや上で、土師器皿の集中する土器群が検出された。

土器の集中する範囲は約1m四方で明瞭な掘形は確認することができなかった。

皿は数十枚分が出土しており、口径8cm、12cm前後の2種類が認められる。完形のものも多く含まれている。

磐石列1001

調査区の北壁沿いに磐石と思われる小規模な石の並びが確認されている。おおよそ東西方向に集約されるものの直線的に並ばない。



図88 第10面上包含層～遺構面直上出土遺物実測図

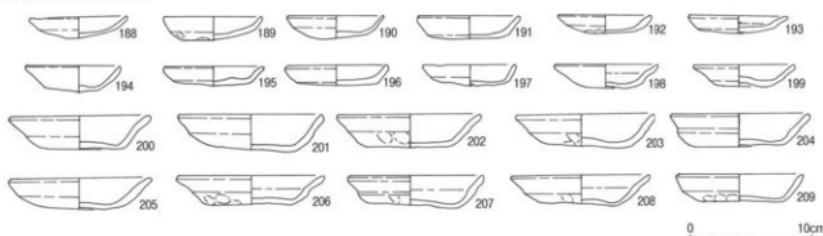


図89 土器群出土遺物実測図



写真125 第10面上包含層～遺構面直上出土遺物（中国製磁器）



写真126 土器群出土遺物

SK1001

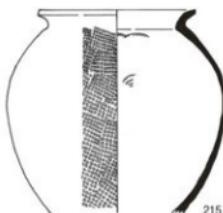
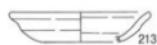
調査区の北西に位置する東西1.0m以上、南北1.0m以上、深さ15cmの土坑で一部調査区外に拡がる。中央よりやや西寄りにに大型の備前焼の甕を据えている。

SK1007

調査区の南西に位置する径1.3m、深さ30cmの土坑である。埋土は暗灰色粘質土で炭が混る。滑石製の石鍋が出土している。

SK1009

調査区の北西に位置する径0.9m、深さ20cmの円形の土坑である。埋土には拳大の礫を含む。亀山焼の甕が出土している。



0 10cm

0 20cm

図91 SK1001出土遺物実測図

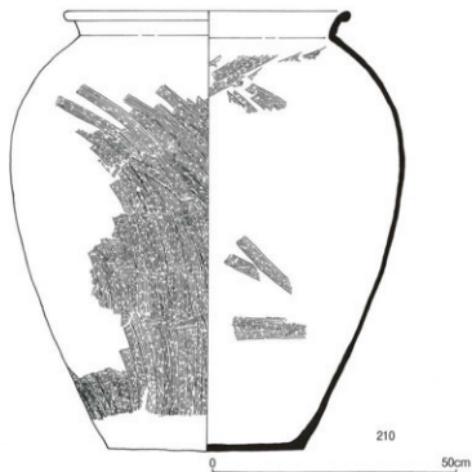
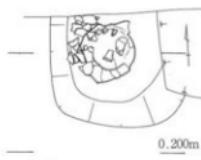


図92 SK1007出土遺物実測図



0.200m
50cm

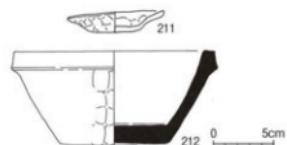


図92 SK1007出土遺物実測図



写真127 SK1007出土遺物



写真128 SK1009出土遺物



写真129 SK1001



写真130 SK1007

SK1012

調査区の北西に位置する東西1.5m以上、南北2.0m、深さ20cmの楕円形の土坑である。

SP1001

調査区の北西部に位置する、径0.7m、深さ15cmのピット（小土坑）である。中央の40cmほどに土師器皿が多量に含まれている。他の土師器皿の集積遺構にくらべ細かく粉碎されたものが多い。

SP1007

調査区の西部に位置する、東西0.6m、南北0.5m、深さ10cmのピットである。北側でSP1006に接する。底部近くでに完形の土師器皿が10数枚出土している。

SX1001

調査区の西部に位置する、東西1.0~1.7m、南北3.0m、深さ15cmの不整径の遺構である。



図96 SP1007平面・断面図



写真131 SK1012出土遺物

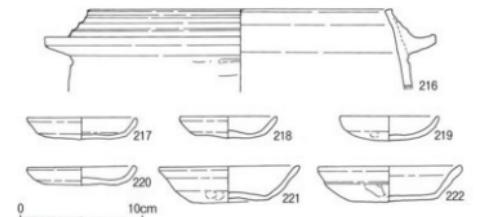


図94 SK1012出土遺物実測図



写真132 SP1007

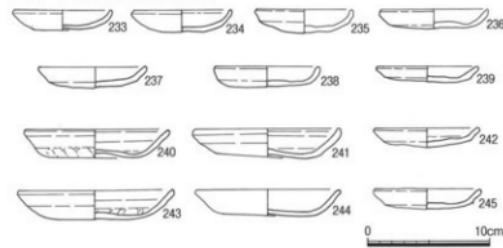


図97 SP1017出土遺物実測図



写真133 SP1007出土遺物

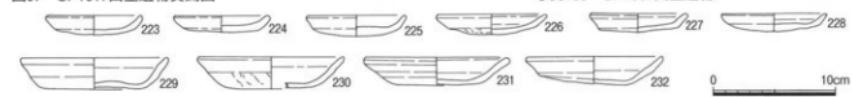


図95 SP1001出土遺物実測図

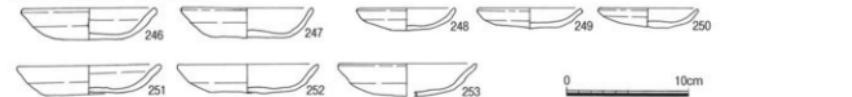


図98 SX1001出土遺物実測図

14. 金属製品

今回の調査によって出土した金属製品は、鉄製品と銅製品が確認されている。

銅製品は銅錢（渡来錢、寛永通宝）、雁首錢、匙、懸仏、小柄、鈎、釘、鉢、鎖、針金、飾り金具、鈴、煙管、目貫、責金具、銅環、棒状銅製品が出土している。不明銅製品も含めて（銅錢は除く）合計155点が出土している。他に鉱滓が31点出土している。

鉄製品は鎌、鑿、刀子、小柄、鍔、包丁、火打ち金、釣針、錘、錐（漁労具）、釘（舟釘、角釘）、小札等が出土している。不明鉄製品も含めて、合計1172点が出土している。そのうちX線写真で確認した遺物も含め、1057点が鉄釘である。他に鉱滓が45点出土している。

まず銅錢では、第8遺構面から新の貨泉が出土している事が特記できる。また、第5遺構面から南宋の慶元通宝の折二錢（径33.94mm）が出土しており、注目される。出土位置と錢種の明確な銅錢の合計では、新、南唐、北宋、南宋、金、西夏、明の渡來錢が117枚、古寛永通宝と新寛永通宝が49枚出土している。錢種の特定や、擾乱出土等により出土位置が特定できない銅錢を合わせると、計304枚の出土となる。

寛永通宝は第5遺構面で古寛永錢が2枚出土しており、初鑄の1626年以降の遺構面だと理解できる。その後、第4遺構面では新寛永錢（1668年初鑄）も含めて10枚が出土し、急速に普及している。

それに対し渡來錢は第6遺構面で18枚、第5遺構面で29枚出土していたが、それ以降、遺構面の新しくなるごとに急激に減少している。確実に第4遺構面で出土した渡來錢は6枚と極めて少なく、第4遺構面で寛永通宝が9枚出土した事と比較して、渡來錢の出土量は逆転している。第3遺構面にいたっては、渡來錢1枚に対し寛永通宝6枚と、渡來錢は刺し錢に紛れ込みますだけの存在となっている。この事実から、江戸幕府による渡來錢の禁止令（1670年）の影響が第4遺構面に反映していると考えられる。

鉄製品では、漁労具の錘がX線透過写真での確認も含め、29点（140～155）SK402から出土している事が注目できる。『日本水産捕探誌』によると、「引揚ゲンヂキ網」と言う種類の網が筑後地方にあり、地引網の一種である。この地引網に使用される沈子が、今回の調査で出土した錘に類似しており、この錘も地引網で使用された可能性が高いと考えられる。

また第10遺構面から小札が出土した事も注目される。遺構面の時期から、13世紀～14世紀頃の遺物である。当時の兵庫津遺跡は基本的に港町であり、小札の出土も初めてである。今後の、当該調査地周囲の調査例の増加を待たなければならないと考えている。

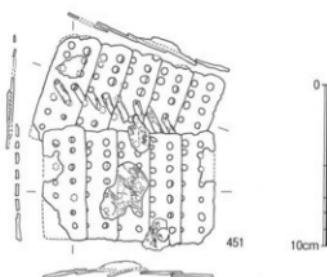


図99 小札実測図

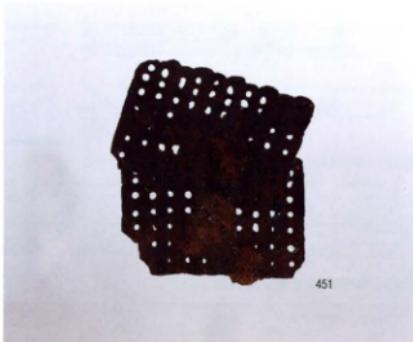


写真134 小札

表2 出土錢一覽

番号	銭種	層位・造構名	番号	銭種	層位・造構名	番号	銭種	層位・造構名
254	開元通宝	SE105下層	278	皇宋通宝	第7造構面	302	政和通宝	第5造構面燒土層
255	開元通宝	第8造構面直上	279	皇宋通宝	SK514	303	紹興元宝	第9造構面包含層
256	開元通宝	第9造構面直上	280	至和元宝	第8造構面包含層	304	正隆元宝	第5造構面燒土層
257	開元通宝	第9造構面直上	281	熙寧元宝	SE104彫形	305	大絶元	第3～4造構面整地土
258	宋通元宝	SB802	282	熙寧元宝	第5造構面燒土層	306	洪武通宝	第5造構面燒土層
259	至道元宝	第5～6造構面整地土	283	熙寧元宝	第5造構面燒土層	307	洪武通宝	第7造構面
260	咸平元宝	第4造構面直上	284	熙寧元宝	第7造構面	308	洪武通宝	SK701
261	咸平元宝	SD701	285	熙寧元宝	第6造構面燒土層	309	洪武通宝	SI701下層石列溝
262	景德元宝	第4造構面燒土層	286	元祐通宝	SK301	310	永樂通宝	第5造構面燒土層
263	景德元宝	第4造構面燒土層	287	元祐通宝	第5造構面	311	永樂通宝	第5造構面燒土層
264	景德元宝	SX605	288	元祐通宝	第5造構面	312	永樂通宝	第6造構面包含層
265	祥符通宝	第9造構面包含層	289	元祐通宝	第6造構面燒土層	313	永樂通宝	第8造構面包含層
266	祥符元宝	第5造構面	290	元祐通宝	第10造構面	314	貨泉	第8造構面包含層
267	祥符元宝	SB701粘土床	291	元祐通宝	SK501	315	慶元通宝	第5造構面燒土層
268	祥符元宝	第8造構面包含層	292	元祐通宝	第5造構面燒土層	316	古寃永通寶	SE104彫形
269	祥符元宝	SP1001	293	元祐通宝	第6造構面燒土層	317	古寃永通寶	第3造構面
270	天聖通宝	第3造構面燒土層	294	元祐通宝	SK514	318	古寃永通寶	SE102下層
271	天聖通宝	第5造構面直上	295	熙聖元宝	S3701粘土小石	319	新寃永通寶	SX101
272	天聖通宝	SK602	296	熙聖元宝	第5造構面燒土層	320	新寃永通寶	SX202
273	大聖通宝	第9造構面包含層	297	元符通宝	第7造構面	321	新寃永通寶	SX203
274	景祐元宝	第5造構面燒土層	298	元符通宝	第7造構面	322	雁首錢	SK203
275	景祐元宝	第5造構面	299	聖宋元宝	第6造構面燒土層	323	雁首錢	SK205
276	皇宋通宝	SK422	300	大觀通宝	SB701鑄石列上	324	雁首錢	第4造構面燒土層
277	皇宋通宝	第5造構面燒土層	301	大觀通宝	第10造構面包含層	325	雁首錢	SK307

表3 錢種別出土層位

錢種	回名	第1面	第2面	第3面	第3～4面	第4面	第5面	第5～6面	第6面	第7面	第8面	第9面	第10面
貨泉	新										1		
開元通宝	南唐	1							1	1	4	3	1
宋通元宝	北宋										1	1	
景德元宝	北宋							1					
咸平通宝	北宋					1				1	1		
景德元宝	北宋					2	1						
祥符元宝	北宋						1			1	2		1
祥符通宝	北宋						1		1			1	
天聖元宝	北宋				1	1			2		1	1	
景德元宝	北宋						2		1				
皇宋通宝	北宋					1	1	3		2	1	1	1
聖宋元宝	北宋											1	
治平元宝	北宋											1	
熙寧元宝	北宋												
元祐通宝	北宋	1	1				2		3	2	2		
元祐通宝	北宋	2	1	1	1	1	6		5		1	4	1
元祐通宝	北宋						5		1				
紹聖元宝	北宋						1				1		
元符通宝	北宋										1		
聖宋元宝	北宋								2		2	1	
大觀通宝	北宋										1		
政和通宝	北宋											1	
紹興元宝	南宋											1	
慶元通宝	南宋												
正隆元宝	金							1					
天聖元宝	西夏				1				1				
洪武通宝	明								1		3	1	
永樂通寶	明								2	2		2	1
古寃永	日本	9	5	6	1	9	2						
新寃永	日本	11	5			1							

表4 出土金属製品一覧

番号	金属別類	遺物名	部位・遺構名	番号	金属種類	遺物名	部位・遺構名
326	銅製品	食食具	第8遺構面包含層	389	鉄製品	釣針	第4遺構面面上整地土
327	銅製品	連獅子口貫	第10遺構面包含層	390	鉄製品	釣針	SK420
328	銅製品	飾金具	第5遺構面施土層	391	鉄製品	釣針	第3～第4遺構面整地土
329	銅製品	鉛	SK605	392	鉄製品	釣針	SK420
330	銅製品	鉛	SK522	393	鉄製品	錘	SK402
331	銅製品	鉛	第6遺構面施土層	394	鉄製品	錘	SK402
332	銅製品	水滴	SK408	395	鉄製品	錘	SK402
333	銅製品	酒器H1	第5遺構面施右列下	396	鉄製品	錘	SK402
334	銅製品	飾金具	SX101中層一下層	397	鉄製品	錘	SK402
335	銅製品	飾金具	SX101中層一下層	398	鉄製品	錘	SK402
336	銅製品	飾金具	SX101中層一下層	399	鉄製品	錘	SK402
337	銅製品	飾金具	SX101	400	鉄製品	錘	SK402
338	銅製品	飾金具	SX101中層一下層	401	鉄製品	錘	SK402
339	銅製品	飾金具	SX605上層	402	鉄製品	錘	SK402
340	銅製品	塵管 鏽首	SK503	403	鉄製品	錘	SK402
341	銅製品	塵管 鏽首	SK408	404	鉄製品	錘	SK402
342	銅製品	塵管 鏽首	第6遺構面	405	鉄製品	錘	SK402
343	銅製品	塵管 鏽首	SK304	406	鉄製品	錘	SK402
344	銅製品	塵管 鏽首	SK416	407	鉄製品	錘	SK402
345	銅製品	塵管 鏽首	第8遺構面直上	408	鉄製品	錘	SK402
346	銅製品	塵管 鏽首	SK408	409	鉄製品	船釘(洛釘)	SX101
347	銅製品	塵管 鏽首	第5遺構面包含層	410	鉄製品	船釘(洛釘)	SX101
348	銅製品	塵管 鏽首	SE107上層	411	鉄製品	船釘(洛釘)	SX101
349	銅製品	塵管 吸い口	SK104掘形	412	鉄製品	船釘(洛釘)	SX101
350	銅製品	塵管 吸い口	SK408	413	鉄製品	船釘(洛釘)	SX101板材下
351	銅製品	塵管 吸い口	第3遺構面土夢地ト	414	鉄製品	船釘(洛釘)	SX301下層
352	銅製品	塵管 吸い口	第2遺構面 燐!覆層上	415	鉄製品	楔状鉄製品	SX101板材下
353	銅製品	塵管 吸い口	第3～第4遺構面夢地ト	416	鉄製品	楔状鉄製品	SX101
354	銅製品	塵管 吸い口	SK408	417	鉄製品	楔状鉄製品	SX101板材下
355	銅製品	塵管 吸い口	第2遺構面 燐!覆層上	418	鉄製品	釘	SK403
356	銅製品	塵管 吸い口 大皿	SK305上層	419	鉄製品	角釘	SK201
357	銅製品	匙	SK208	420	鉄製品	角釘	SX202
358	銅製品	匙	SX101中層一下層	421	鉄製品	角釘	第3～第4遺構面夢地ト
359	銅製品	棒状銅製品	第6遺構面焼土層	422	鉄製品	角釘	第2遺構面 燐上層
360	銅製品	小柄	第3～第4遺構面夢地ト	423	鉄製品	角釘	SK412
361	銅製品	鉗	SX307下層	424	鉄製品	角釘	SE107掘形
362	銅製品	鉗	第4遺構面直上整地土	425	鉄製品	船釘(洛釘)	SK406
363	銅製品	鉗	第3遺構面土夢地ト	426	鉄製品	角釘	SK406
364	銅製品	鉗	SX202	427	鉄製品	船釘(海折釘)	SX101
365	銅製品	鉗	SK144	428	鉄製品	角釘	SK301
366	銅製品	鉗	SX202	429	鉄製品	船釘(海折釘)	SX301下層
367	銅製品	角釘	SE106上層	430	鉄製品	船釘(海折釘)	SK207
368	銅製品	鉛	第6遺構面焼土層	431	鉄製品	角釘	SX101底板材ト
369	銅製品	鉛	第7遺構面	432	鉄製品	角釘	第4遺構面直上整地土
370	銅製品	鉛	第2遺構面施土層	433	鉄製品	角釘	SE106上層
371	銅製品	鉛	第5遺構面	434	鉄製品	角釘	SE102掘形
372	銅製品	針金	SX101中層一下層	435	鉄製品	鑿	第3～第4遺構面
373	銅製品	銅環	SX101中層一下層	436	鉄製品	刀子	第8遺構面 包含層
374	銅製品	銅環	SE104	437	鉄製品	刀子	第7遺構面
375	銅製品	釣針	SX101	438	鉄製品	刀子	第4遺構面直上整地土
376	鉄製品	釣針	SK903	439	鉄製品	刀子	SK408
377	鉄製品	釣針	SD502	440	鉄製品	刀子	SK303
378	鉄製品	釣針	SX209	441	鉄製品	小柄の中身	第5遺構面直上焼上面ト
379	鉄製品	釣針	第5遺構面	442	鉄製品	鉗	第3～第4遺構面整地土
380	鉄製品	釣針	第4遺構面土夢地ト	443	鉄製品	包丁	第5遺構面
381	鉄製品	釣針	SK402	444	鉄製品	鎌	第3～第4遺構面夢地ト
382	鉄製品	釣針	第5遺構面土夢地ト 燐上面ト	445	鉄製品	鐵板	SK602
383	鉄製品	釣針	SK209	446	鉄製品	鐵板	SK405
384	鉄製品	釣針	SK301	447	鉄製品	火打ち金	第5遺構面
385	鉄製品	釣針	SK422	448	鉄製品	針状鉄製品	SK412
386	鉄製品	釣針	SK412	449	鉄製品	鍼	第1遺構面 燐石列中 燐土層中
387	鉄製品	釣針	SK420	450	鉄製品	鎌	SK504
388	鉄製品	釣針	第4遺構面直上整地土	451	鉄製品	小札	第10遺構面

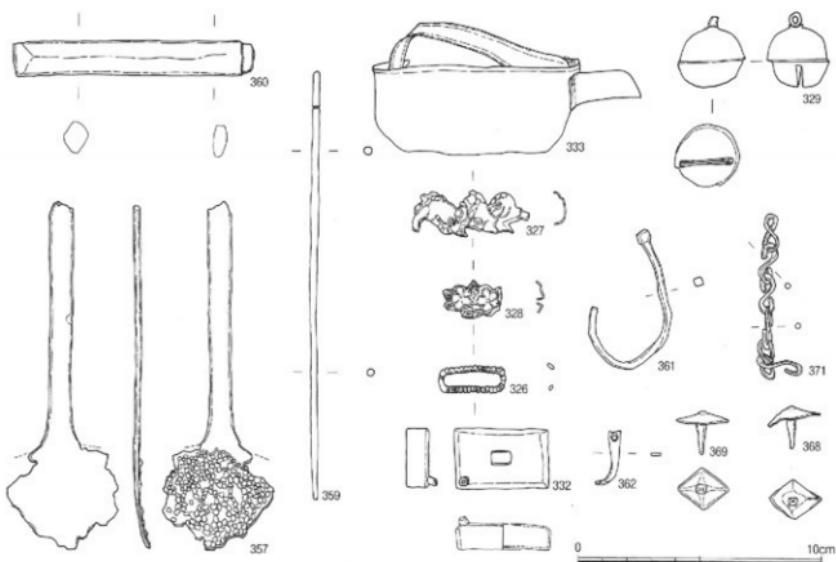


図100 出土銅製品実測図

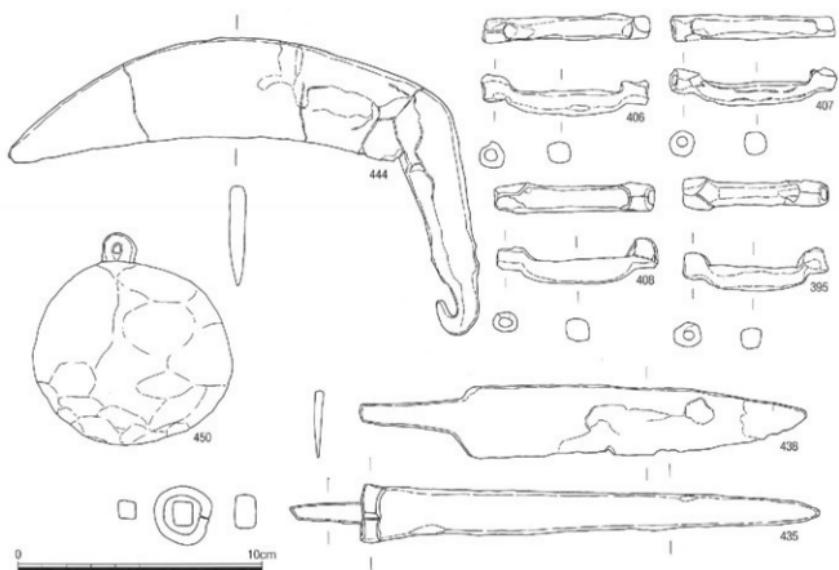


図101 出土鉄製品実測図



写真135 出土銭貨（渡来銭）

※遺物番号は各列左から右の順



314



327

328

写真136 貨泉

写真139 金具類



315



317

318



写真137 慶元通宝

写真140 銅製鈴



316



317



318



332



319



320



321

写真141 水滴



322



323



324



325



333

写真138 出土銭貨（寛永通宝・雁首錢）

写真142 片口酒器



写真143 飾金具・キセル

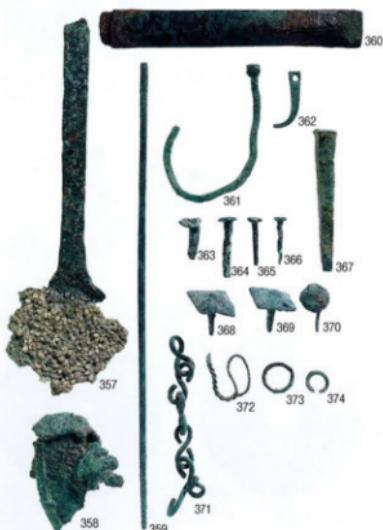


写真144 銅製品



写真145 鉄製釣針



写真146 鉄製錘



写真147 鉄製釘



写真148 鉄製品

15. 炭化遺物の調査

兵庫津遺跡の調査では何層もの火災層が確認されており、これに伴って炭化物がしばしば出土する。今回も木材や大型植物遺体などが出土しており、これらについての調査を実施した。

〔炭化木材〕

炭化木材はその出土状況より建築部材であることが推定でき、15点のサンプルについて樹種同定調査を実施した。同定作業は木口・柾目・板目の各断面について、実体顕微鏡および金属顕微鏡を用いて落射光下で行なった。以下に同定根拠と結果について記す。なお、丸付き数字は写真149の写真番号を表す。

表5 炭化木材一覧

No.	地区	遺物名	出土層位・遺構	同定結果
1	C-3	板材	SK209	マツ科 マツ属
2	C-3	板材	SB202	マツ科 マツ属
3	C-3	板材	SB202	スギ科 スギ属
4	C-3	板材	SB202	スギ科 スギ属
5	C-3	板材	SB201	スギ科 スギ属
6	C-3	板材	SB201	広葉樹(散孔材)
7	C-3	板材	SB201	マツ科 マツ属
8	C-3	板材	SB201	根株
9	C-3	板材	SB202	ブナ科 アカガシ亜属
10	C-3	板材	SB202	スギ科 スギ属
11	C-3	板材	SB202	スギ科 スギ属
12	C-3	丸材	第5~6面	ツバキ科
13	C-3	丸材	第5~6面	ツバキ科 サカキ
14	C-3	板材	第5~6面	イネ科 タケ亜科
15	C-3	板材	第5~6面	スギ科 スギ属

マツ属 *Pinus*

①は3年輪にわたる木口面で、下方が樹心方向である。中央付近に樹脂道が接線方向に横断するのが観察できる。②は柾目面で、写真中央に放射組織の断面が6細胞高存在するが、放射仮道管の観察ができなかつたため、ニヨウマツかゴヨウマツまでの同定には至っていない。放射柔細胞の壁孔は窓状で、1分野あたり1ないしは2個である。また板目面では点在する単列の放射組織中に水平樹脂道の存在が確認できた。

スギ属 *Cryptomeria* D. DON

③は3年輪にわたる木口面で、下方が樹心方向である。垂直樹脂道は存在しない。④は柾目面で、仮道管内にらせん肥厚は見られない。写真中央に15細胞高を数える放射組織が存在するが、すべて柔細胞で構成される。分野壁孔はスギ型で1分野あたり2個存在する。板目面では、3~10細胞高以上を数える単列の放射組織が点在する。

アカガシ亜属 *Cyclobalanopsis* PRANTL

⑤は4年輪にわたる木口面である。放射孔材であり、写真では見づらいが中央付近を広放射組織が縦断する。⑥は柾目面で、中央や左側を大道管が縦走している。せん孔板は单せん孔で、点在する放射組織は同性の平伏細胞からなる。⑦は板目面で、左寄りに広放射組織が存在する。

サカキ *Cleyera* THUNB

⑧は2年輪にわたる木口面である。小型の道管が散在する散孔材である。⑨・⑩は柾目面であり、⑨の中央に道管内の階段せん孔が見える。barは30以上を数える。また写真⑩の中央には平伏細胞と直立細胞からなる異性の放射組織が観察できる。写真では観察できないが、直立細胞と道管との接合面には大型の壁孔が存在する。

タケ亜科 *Phyllostachys*

⑪・⑫は木口面で上方が表皮側となり、繊維方向の柔組織の中に維管束組織の配列が見える。

結果

今回同定を行なった木材は近世町屋よりの出土である。マツ属、スギ属は建築部材として通有の材であり、板材に加工されて使用されている。一方、ツバキ科、サカキについては径が2~3cm程度の丸材であり、燃料炭など建築材以外の用途を考える必要がある。タケ亜科については、広範にわたる用途が推定されるが、詳細は不明である。

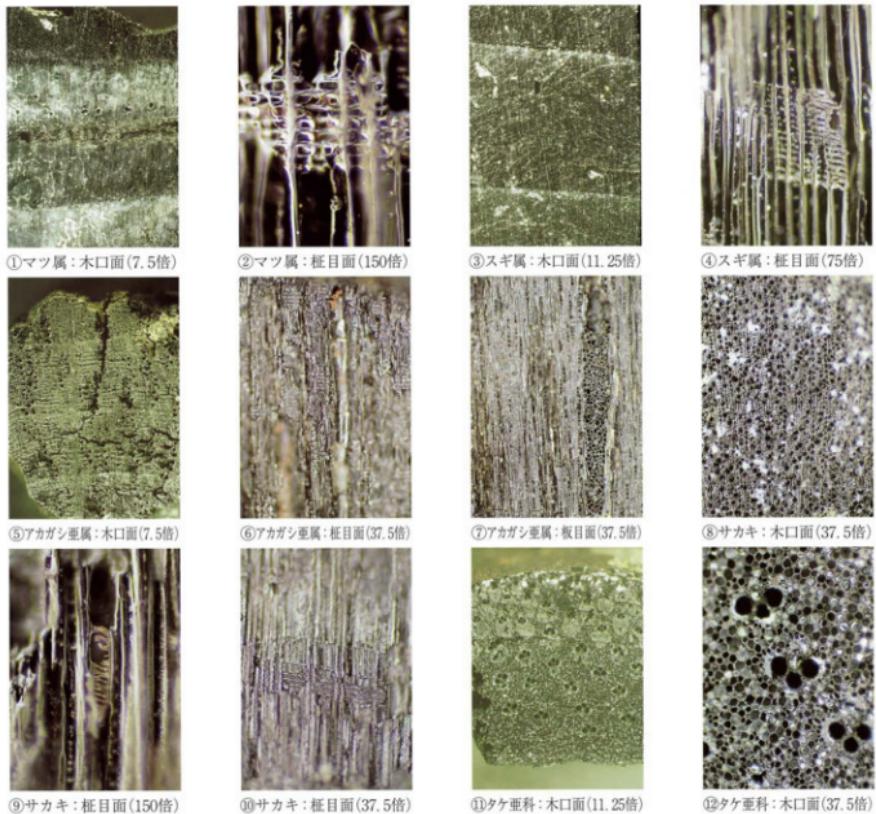


写真149 炭化木材顕微鏡写真

〔炭化大型植物化石〕

下記表のとおり、炭化した大型植物化石が出土している。ほとんどが米粒であり、中世の遺構、包含層より僅かにモモ核と考えられる遺体などが検出されている。

表6 炭化大型植物化石一覧

No.	地区	出土層位・遺構	種名	点数
1	C-3	SE104	米粒	1
2	B-3	SP101	米粒	2
3	B-3	SP102	米粒	2
4	B-3	燒土層覆土	米粒	經約4cmの塊状
5	B-3	燒土層上層	米粒	4
6	B-3(西)	燒土層(中)	米粒	8
7	B-3(東)	燒土層	米粒	26
8	B-2	燒土層	米粒	29
9	B-3(東)	SX201(燒土瓦砾り)	米粒	51
10	C-3	SK209	米粒	經約8cmの塊状
11	B-3	SX207北側	米粒	3
12	B-3	SK201上層	米粒	2
13	C-4	第6面上焼土層上	?	1
14	C-3(南)	SK603	モモ核	1
15	C-3(南)	SK603	?	1
16	C-4(南)	第7面直上?	?	1
17	C-3	第8面上	米粒	3
18	C-3	第9~10面上部群	米粒	2



写真150 炭化大型植物化石（左3点・1倍／右3点・3倍）

16. 遺構の切り取り

発掘調査において検出した各種遺構の取り扱いは、写真、実測図、3Dイメージングなどによる記録保存が主体となる。しかし必要に応じ、遺構そのものを現地から切り取って持ち帰るケースもある。例えば埋葬施設に人骨が遺存している場合、人骨が脆弱化しているために骨単体での取り上げは困難であり、なおかつ埋葬遺構も同時にそのまま切り取って保存すべきであると考えられる。

今回の兵庫津遺跡の発掘調査においても、町屋の土壁材が倒壊して平面65cm×75cm、厚さ10cmの範囲で遺存していた。壁材は火災によって焼けているが、壁土が重層をなして構築されている状況がよくわかる。また心材として木舞に使用されている竹などの有機質は炭化していた。通常、火災などによって倒壊した家屋の構造材は整地する際などに廃棄されて失われる場合が多く、今回の検出例は貴重であるとの判断から、以下の工程で現地から切り取り持ち帰ることとなった。

まず切り取る範囲について周囲土壤から切り出すが、遺構下部の基盤層も含めて20cm程度深めに切り出す。これは遺構を地面から切り離す際、下部にトンネルを通して、その中に硬質発泡ウレタンフォームを充填するためである。下部にウレタンフォームを充填して地面と切り離し終えた後、周囲に角材を補強として入れ、硬質発泡ウレタンフォームで梱包した。その際、遺構表面の養生として紙製ワイパーを水貼りしてウレタンフォームと遺構土壤の接着を防いでいる。梱包が完了した遺構は神戸市埋蔵文化財センターに持ち帰った。今後の作業としては、壁土の素材や有機物の同定など詳細な調査を実施し、壁材そのものの強化など保存科学的処置を施した上で、その成果を市民に還元する方法を検討中である。



写真151 壁材と周辺の状況



写真152 切り取り前状況



写真153 表面の養生



写真154 ウレタンフォームでの梱包

第3章 出土動物遺存体と人骨

1. 兵庫津遺跡第53次調査出土の動物遺存体

丸山 真史（奈良文化財研究所・客員研究員）

1) 概要

当調査では13世紀から幕末までの遺構あるいは遺物包含層から動物遺存体が出土しており、破片数にして800点以上を数え、種類や部位などを同定したものは324点にのぼる（表7・写真155）。その内訳はサンゴ類3点、貝類23点、魚類267点、両生類3点、鳥類5点、哺乳類23点である。SK104、SK109、SX209、SK409、SK420の資料は、埋土を1mm目のフルイを用いて水洗選別して採取し、それ以外は調査中に肉眼で確認して採集したものである。なお、以下で記載する魚類などの大きさは、奈良文化財研究所所蔵の現生骨格標本との比較による。

2) 種類別の特徴

サンゴ類 キクメイシ亜目が3点出土し、そのうち1点は約12cm四方を測る（表8-1）。

貝類 すべて海水産であり、巻貝10点、二枚貝13点を数える（表8-2、3）。巻貝はアカニシが最多で5点出土しており、小さな個体で殻長95mm、それ以外は100mm以上の個体である。1点は被熱しており、殻体外面が部分的に黒色を呈する。次いでサザエが3点出土しており、そのうち2点は蓋である。テングニシ、バイが1点ずつ出土している。二枚貝ではトリガイが最多で5点（左1右1不明3）出土している。次いでイタボガキ科が4点（左2右2）出土しており、そのうち3点はマガキに、1点はイタボガキに似る。フネガイ科（左右不明2）が2点、アカガイ（左）とハマグリ（右）が1点ずつ出土している。

魚類 魚類は、最多の出土量で計267点を数える（表8-4、5）。マダイとフグ科が最多で、それぞれ39点が出土している。マダイの前頭骨2点は「兜割り」されており、前上顎骨、前鰓蓋骨、主鰓蓋骨が1点ずつ切断され、主鰓蓋骨1点に切傷が見られる。小さくとも体長20cm以上で、20~30cmに集中している。マダイと同じタイ科に分類されるクロダイ属は1点、種を特定できないタイ科が15点出土している。フグ科は歯骨などが出土しており、歯骨、主鰓蓋骨に切傷が見られる。体長20cm以上の個体が大部分を占めるが、それ以下の個体も少量含まれる。これらに統いてコチ科30点、オニオコゼ属28点、ハモ属18点、ウシノシタ科17点、ハタ科10点が出土している。コチ科は体長30~40cmが約半数を占め、歯骨や椎骨が切断されている。オニオコゼ属は体長15~20cmのものが大部分であり、ウシノシタ科はいずれも体長20~30cm、ハモ属は体長100cm以下のものが大部分で、体長150cmほどの大型個体も含まれる。ハタ科の半数以上は体長40cm以上であり、角舌骨に切断痕が、擬鎖骨に切傷が見られる。10点以下の出土に留まる種類は多く、エイ・サメ類、スズキ、ミシマオコゼ科、カレイ科が7点ずつ、ブリ属5点、フサカサゴ科4点、アイナメ属、イシダイ属、ニベ科、ニシン科が3点ずつ、アナゴ科、アジ科、エソ科、メゴチ、タチウオ科、オニオコゼ属とは異なるオコゼの仲間が2点ずつ、カマス科、カワハギ科、コイ、ソウダガツオ属、ヒゲダイ属、ヒラメ、ブダイ科、ホウボウ科、マグロ属が1点ずつ出土している。

両生類 SD503からカエル類の大腿骨（右）SK604から大腿骨（右）、脛・腓骨が1点ずつ、計3点が出土している。SD503の大腿骨はトノサマガエルよりやや大きく、その他はトノサマガエルとほぼ同大である。

表7 動物遺存体種名表

刺胞動物門 Cnidaria	スズキ目 Percidae
花虫綱 Anthozoa	スズキ科 Percichthyidae
イシサンゴ科 Scleractinia	スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i>
キクメイシ亜目の一種 <i>Faviina</i> fam., gen. et sp. indet.	ハタ科 Serranidae
軟體動物門 Mollusca	ハタ科の一種 Serranidae gen. et sp. indet.
腹足綱 Gastropoda	アジ科 Carangidae
古腹足目 Vetigastropoda	アジ科の一種 <i>Seriola</i> sp.
サザエ科 Turbinidae	アジ科の一種 <i>Carangia</i> gen. et sp. indet.
サザエ <i>Turbo cornutus</i>	イサキ科 Haemulidae
新腹足目 Neogastropoda	ヒガレイ属 <i>hapatogenys</i> sp.
アッキガイ科 Muricidae	タイ科 Sparidae
アカニシ <i>Rapania venosa</i>	クロダイ属の一種 <i>Acanthopagrus</i> sp.
バイ <i>Bolyonia japonica</i>	マダイ <i>Pagrus major</i>
チングニシ科 Melongenidae	タイ科の一種 Sparidae gen. et sp. indet..
チングニシ <i>Ilemifusus tuba</i>	ニベ科 Sciaenidae
斧足綱 Bivalvia	ニベ科の一種 <i>Sciaenidae</i> gen. et sp. indet.
フネガイ目 Arcoida	イシダイ科 Oplegnathidae
フネガイ科 Arcidae	イシダイ属の一種 <i>Oplegnathus</i> sp.
アカガイ <i>Spharaca broughtonii</i>	ブダイ科 Scaridae
フネガイ科の一種 Arcidae gen. et sp. indet.	ブダイ科の一種 <i>Scaridae</i> gen. et sp. indet.
カキ目 Ostreida	ミシマオコゼ科 Uranoscopidae
イタボガキ科 Ostreidae	ミシマオコゼ科の一種 <i>Uranoscopidae</i> gen. et sp. indet.
イタボガキ科の一種 Ostreidae gen. et sp. indet.	カマス科 Sphyraenidae
マルダレガイ目 Veneroida	カマス科の一種 <i>Sphyraenidae</i> gen. et sp. indet.
ザルガイ科 Cardiidae	タチウオ科 Trichiuridae
トリガイ <i>Fulvia mutica</i>	タチウオ科の一種 <i>Trichiuridae</i> gen. et sp. indet.
マルダレガイ科 Veneridae	サバ科 Scombridae
ハマグリ <i>Moretrix lusoria</i>	ソウダガツオ属 <i>Aaxis</i> sp.
脊椎動物門 Vertebrata	マグロ属の一種 <i>Thunnus</i> sp.
軟骨魚綱 Chondrichthyes	カレイ目 Pleuronectiformes
板鰓魚綱の一種 Elasmobranchii, order, fam., gen. et sp. indet.	ヒラメ科 Bothidae
硬骨魚綱 Osteichthyes	ヒラメ <i>Paradichthys olivaceus</i>
ウナギ目 Anguilliformes	カレイ科 Pleuronectidae
アナゴ科 Congridae	カレイ科の一種 <i>Pleuronectidae</i> gen. et sp. Indet.
アナゴ科の一種 Congridae gen. et sp. indet.	ウシノシタ科 Cynoglossidae
ハモ科 Muraenesocidae	ウシノシタ科の一種 <i>Cynoglossidae</i> gen. et sp. indet.
ハモ属の一種 <i>Muraenesox</i> sp.	フグ目 Tetraodontiformes
ニシン目 Clupeiformes	カワハギ科 Monacanthidae
ニシン科 Clupeidae	カワハギ科の一種 <i>Monacanthidae</i> gen. et sp. indet.
ニシン科の一種 Clupeidae gen. et sp. indet.	フグ科 Tetraodontidae
コイ目 Cyprinida	フグ科の一種 <i>Tetraodontidae</i> gen. et sp. indet.
コイ科 Cyprinidae	鳥類 Aves
コイ <i>Cyprinus carpio</i>	ペリカン目 Pelecaniformes
ヒメ目 Aulopiformes	ウ科 Phalacrocoracidae
エソ科 Synodontidae	ウ科の一種 <i>Phalacrocoracidae</i> gen. et sp. indet.
エソ科の一種 Synodontidae, gen. et sp. indet.	カモ目 Anseriformes
カサゴ目 Scorpaeniformes	カモ科 Anatidae
フサカサゴ科 Scorpaenidae	カモ科の一種 <i>Anatidae</i> gen. et sp. indet.
フサカサゴ科の一種 Scorpaenidae gen. et sp. indet.	哺乳綱 Mammalia
オニオコゼ科 Synanceidae	偶蹄目 Artiodactyla
オニオコゼ属の一種 <i>Inimicus</i> sp.	シカ科 Cervidae
ホウボウ科 Triglidae	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>
ホウボウ科の一種 Triglidae, gen. et sp. indet.	ウサギ目 Lagomorpha
コチ科 Platyceratidae	ウサギ科 Leporidae
メガチ <i>Suggrinus meerervoortii</i>	ノウサギ <i>Lepus brachyrurus</i>
コチ科の一種 Platyceratidae gen. et sp. indet.	齧齒目 Rodentia
アイナメ科 Hexagrammidae	ネズミ科 Muridae
アイナメ属の一種 <i>Hexagrammos</i> sp.	ネズミ科の一種 <i>Muridae</i> gen. et sp. indet.

表 8 水産の動物遺存体集計表

1 サンゴ類			
時 期	層 位	小分類	計
13世紀～14世紀	10向上に含む層	キクメイシ科	1
17世紀後葉	3面上整地層	キクメイシ科	1
17世紀～後葉	SK409	キクメイシ科	1
計			3

2 旗足綱			
時 期	層 位	小分類	計
15世紀	9面に包含層	アカニシ	2
16世紀	SK701 7面	サザエ アカニシ	1 1
17世紀前葉	5面下層面検査 5面の下層面	アカニシ	1 1
17世紀初	6面土焼土層	バイ	1
17世紀後葉	3面下層	サザエ	1
18世紀初	SX203	サザエ	1
幕末~江戸後期	挽上層土層	テンダニシ	1
計			10

4. 骨魚類				
時期	種 類	小分類	部位	計
17世紀中～後葉	SK045	エイ・サメ類	椎骨	1
	4面精査	エイ・サメ類	椎骨	1
17世紀後葉	4面直上整地土	サメ類	椎骨	1
18世紀初	SX209	エイ・サメ類	椎骨	1
幕末～江戸後期	SK101	エイ・サメ類	椎骨	2
	SK109	エイ・サメ類	椎骨	1
計				7

5 硬骨魚綱						
時期	層位	小分類	部位	左右	-	計
13世紀～14世紀	SK1007 9～10齒工具器群	エソ科 フグ科	歯骨 ＊2	1 1		1 1
	SK903 9面上包含層	フグ科 コチ科	椎骨 前歯骨	1 1		1 1
15世紀			角骨 擬錐骨 両骨	1 1	1 1	1 1
		フグ科	主錐歯骨 前上顎骨 部位名不明 副錐形骨	2 1 1	2 1 1	2 1 1
	SK810 8面上包含層	フグ科 マグロ属 スズキ フグ科 マダイ ハク科 ハモ属 コチ科	歯骨 異歫骨 椎骨 主錐歯骨 前上顎骨 角舌骨 前上顎骨 基節骨	1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1
16世紀	6面上丸土層上層	コチ科 カレイ科	方骨 ＊3	1 1		1 1
	SK604	コチ科 タイ科	主錐歯骨 椎骨 椎骨	1 2 1	1 2 1	1 2 1
16世紀末～17世紀初	5下層膚精査	スズキ フグ科 コイ	角骨 後側頸骨 椎骨	1 1	1 1	1 1
	5曲の下層面	ハゼ属	椎骨	1		1
	5面下壁上層	ハゼ属	歯骨	1		1
17世紀前半						

3 犬足網						
時期	層位	小分類	左	右	-	計
13世紀～14世紀	10面上包含層	トリガイ			1	1
16世紀	7面上	アカガイ	1			1
17世紀前葉	5面の下脚面	トリガイ	1	1		2
17世紀前葉	5～6遺構面	トリガイ			1	1
17世紀前～中葉	SI1503	ハマグリ	1			1
17世紀中～後葉	SK409	イタボガキ科		1		1
	SK408	イタボガキ科	1			1
18世紀初	SX203	トリガイ			1	1
	2遺構面上地七	イタボガキ科		1		1
	乳灰色砂	イタボガキ科	1			1
幕末～江戸後期	SI101中～下層(西側)	フネガイ科			1	1
	石列10裏込	フネガイ科			1	1
計						13

時 期	層 位	小分類	部 位	左	右	階
17世紀前葉	5面下層面	ハモ属	齒骨	1	1	
		イシグイ属	上前顎骨	1	1	
		タイ科	上頸顎骨	1	1	
		ハモ属	齒骨	1	1	
		マダイ	前上顎骨	1	1	
	6面焼土層	マダイ	前上顎骨	1	1	
		カレイ科	*3	1	1	
		タイ科	主上顎骨	1	1	
		カレイ科	尾舌骨	1	1	
		コチ科	主鰓蓋骨	1	1	
17世紀後葉	6面上整地土	コチ科	前鰓蓋骨	1	1	
		フサカサゴ科	齒骨	1	1	
		マダイ	角骨	1	1	
		SX303周辺	カレイ科	*3	1	1
		マダイ	擬鱗骨	1	1	
	4面上整地土	ハク科	擬鱗骨	1	1	
		タイ科	擬鰓骨	1	1	
		フグ科	主鰓蓋骨	1	1	
		ブリ属	齒骨	1	1	
		マダイ	角舌骨	1	1	
17世紀前～後葉	4面直上整地土	マダイ	前齶骨	1	1	
		フグ科	基鰓蓋骨	1	1	
		SD503	角骨	1	1	
		マダイ	齒骨	1	1	
		ミシマオコゼ科	主上顎骨	2	2	
	SK513	アナゴ科	基後頭骨	1	1	
		クロダイ属	前上顎骨	1	1	
		ミシマオコゼ科	主鰓蓋骨	1	1	
		SK514	コチ科	齒骨	1	1
		4面ベース土	ニベ科	齒骨	1	1
	5面上整地土	ハモ属	半棘蓋骨	1	1	
		マダイ	舌顎骨	1	1	
		ブリ属	*2		1	1
		マダイ	方骨	1	1	
		二ペ科	前上顎骨	1	1	
		ハモ属	前齶骨	1	1	
		マダイ	齒骨	1	1	
		上整地土	上綫鎖骨	1	1	
			前上顎骨	1	1	
			上綫鎖骨	1	1	

時 期	層 位	小分類	部 位	左	右	-	計
17世紀前～後葉	5面土上地土	マダイ	前頭骨	1	1		
	オニオコゼ属	角骨		1	1		
	コチ科	側骨		1	1		
	フサカサゴ科	椎骨		1	1		
17世紀後葉	SX301の下層	コチ科	主鰓蓋骨	1	1		
	SX304下層整地土	フグ科	翼状骨	1	1		
	3面下層	フグ科	前上顎骨	1	1		
17世紀中～後葉	SK402		歯骨	1	1		
		フグ科	舌顎骨	1	1		
			椎骨		1		
			翼状骨	1	1		
	SK409	オニオコゼ属	角骨	1	1		
		カワハギ科	第1背鰭棘		1		
		コチ科	角舌骨	1	1		
		スズキ	基蝶骨	1	1		
	SK405		方骨	1	1		
			角骨	1	1		
		ハモ属	齒骨	1	1		
			上後頭骨		1		
	SK408	フグ科	歯骨	1	1		
		コチ科	方骨	1	1		
		フグ科	主鰓蓋骨	1	1		
		SK414	ヒゲダイ属	角骨	1	1	
	SK422	スズキ	主鰓蓋骨	1	1		
		アジ科	主鰓蓋骨	1	1		
		ハタ科	前鰓蓋骨	1	1		
		フグ科	主上顎骨	1	1		
4面精査	SK104	マダイ	前鰓蓋骨	1	1		
			間鰓蓋骨	1	1		
			前鰓蓋骨	2	2		
			椎骨	2	2		
	SX209	ミシマオコゼ科	角舌骨	1	1	2	
		ハタ科	角舌骨	1	1		
		ハモ属	前上顎骨	1	1		
		マダイ	主鰓蓋骨	1	1		
18世紀初	SK104	アイナメ属	前上顎骨	1	1		
		アジ科	歯骨	1	1		
		カマス科	歯骨	1	1		
		コチ科	角骨	1	1		
		スズキ	前鰓蓋骨	3	1	4	
		タイ科	椎骨	2	2		
		三ハ科					
		フグ科	主上顎骨	1	1		
	SX209	マダイ	上後頭骨	2	2		
		アイナメ属	* 1	1	1		
		アジ科	歯骨	1	1		
		カマス科	歯骨	1	1		
		コチ科	角骨	1	1		
		スズキ	前鰓蓋骨	1	1		
		タイ科	椎骨	1	1		
		三ハ科					
幕末～江戸後期	SK104	フグ科	主鰓蓋骨	1	1		
		マダイ	前鰓蓋骨	1	1		
		エソ科	歯骨	1	1		
		オニオコゼ属	前鰓蓋骨	1	1		
		アヒルガニ科	歯骨	2	2		
	SK104	アヒルガニ科	主鰓蓋骨	1	1		
		ウシノシタ科	歯骨	10	10		
		エソ科	歯骨	1	1		
		オニオコゼ属	前鰓蓋骨	1	1		
		マダイ	前鰓蓋骨	1	1		

* 1 : 前上顎骨 / 齧骨
 * 2 : 前上顎骨 - 齧骨 - 離骨板
 * 3 : 第1歯骨間隣

鳥類 カモ科はSK409から桡骨(右)、尺骨(左)、SK405から烏口骨(右)が1点ずつ、計3点が出土しており、いずれもカルガモと同大である。ウ科は第6面上整地土から大腿骨(右)、SK603から手根中手骨(右)2点が出土しており、ウミウカワウなどと同大である。いずれも、解体痕は見られない。

哺乳類 哺乳類は23点が出土している(表9)。ネズミ科の椎骨など17点が出土しており、大型のクマネズミ属が含まれている可能性がある。ネズミ科に統いてニホンジカの脛骨など4点、ウサギの肩甲骨など2点が出土している。ニホンジカは脛骨のほか中手骨、中足骨が出土しており、いずれも骨製品の素材に適した部位であるが、加工痕は見られない。

骨角製品 第4面上整地土から棹秤の竿、SE104から用途不明の円筒状製品と双六の駒と思われるものが1点ずつ出土している(写真156)。棹秤の竿は断面が径5.0mmのほぼ正円形で、棒状を呈する。片方の端部が破損し、残存長105.7mmを測る。骨製であり、3本の軸線に沿って刃盛りを穿っている。円筒状製品は鹿角製であり、径20.9mm、最大長36.2mmを測る。円筒を半載したように破損している。双六の駒と思われるものは径24.1mm、高さ11.2mmを測る円筒状の骨製品であり、破損して全体の2/3程度が残った状態である。

3) 考察

これまで兵庫津遺跡では中世から幕末までの動物遺存体が出土している(丸山・松井2006など)。当調査地一帯は兵庫津北浜の魚市場があった宮前町に位置しており、当調査地に近接した第14次調査では近世の魚貝類遺存体や漁具が大量に出土し、水産業に関連する町屋で魚貝類の加工を行っていたことを指摘した(丸山・松井2010)。

当調査地では、貝類と魚類は13~19世紀まで継続して出土している。ところが、鳥類と哺乳類は17世紀中葉までは食用と考えられるカモ科、ニホンジカが出土しているのに対して、それ以後は食用と考えられないネズミ科だけが出土している。17世紀代に食用の鳥獣類の出土が低調になることは、第14次調査出土の動物遺存体と同様の傾向を示している。動物遺存体の半数以上を魚貝類が占めることは、京都や大阪などの屋敷地と同様であるが、トリガイの出土やマダイの出土比率がそれほど高くないことが当調査地の特徴である。第14次調査地では17世紀後葉~18世紀初頭のトリガイを大量に出土する遺構があり、そこで剥き身を製造していたと考えられる。今回、兵庫津で中世からトリガイを消費していたことが明らかとなったが、近世の遺構からも出土量が少なく、剥き身の製造が行われたとは考えにくい。また、そこでは食用とならない貝種が含まれていたが、当調査地では食用となるものばかりである。魚類ではフグ科、コチ科、オニオコゼ属などの出土比率が高いことは、第14次調査地と類似した魚類組成を示すが、そこで多く見られた雑魚と言えるような小型魚は当調査地で少ない。

表9 哺乳類集計表

時期	層位	小分類	部位	左	右	-	計
15世紀	SK903 第9面上包青層	ネズミ科	椎骨		5	5	
		ニホンジカ	中手骨		1	1	
16世紀	第8面上包含層	ノウサギ	肩甲骨	1		1	
	第6面ベース土	ノウサギ	中足骨	1		1	
	第7面	ニホンジカ	中足骨	1		1	
16世紀末~17世紀初	第6面焼土層	ネズミ科	大腿骨	1		1	
	第6面上	ニホンジカ	脛骨	1		1	
17世紀前~中葉	第5面焼土層	ネズミ科	大腿骨	1		1	
	第5面上移地上	ネズミ科	脛骨	1		1	
18世紀初	SX209	ネズミ科	下顎骨	1		1	
			対角骨	1		1	
			脛骨	1		1	
			椎骨		3	3	
			腰椎	1		1	
計							23

魚類構成から見れば、第14次調査地のような水産業に関連したものであることを想定できる。また、比較的大きな個体を選別して持ち込んでいる可能性がある。貝類は食用となり、かつ大型個体ばかりであることから、これらも選別されたものであろう。これらの魚貝類は、京都や大阪の屋敷地とは異なる特徴が見られ、漁獲地に近いことや水産業に関連する町屋群での消費を反映していると言えよう。

4) まとめ

当調査地ではトリガイが出土し、マダイの出土比率はそれほど高くなく、フグ科、コチ科などが多く出土しているという特徴が見られる。また、17世紀中葉以後は食用となるものでは魚貝類ばかりが出土している。このことは近接した第14次調査地の動物遺存体の特徴と類似し、当地一帯に特徴的な魚貝類の利用があったことを示している。また、小さな個体が少なく、個体を選別している可能性も指摘できる。当調査地で出土している魚貝類の具体的な利用法は、第14次調査との比較や、共伴する遺物とあわせて検討する必要がある。

参考文献

- 丸山真史・松井章2006「兵庫津遺跡（御崎本町地点）出土の脊椎動物遺存体」大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第1号 大手前大学史学研究所pp. 195-209
丸山真史・松井章2010「兵庫津遺跡第14次調査出土の動物遺存体」『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査』第1分冊 神戸市教育委員会 pp. 353-386



写真155 動物遺存体（水産物）



写真156 骨角製品

2. 兵庫津遺跡第53次調査出土の人骨

大藪 由美子（奈良県立橿原考古学研究所）

1) 概要

第8遺構面上包含層から、頭蓋骨、下顎骨、歯牙が出土しており、頭蓋骨と下顎骨はいずれも小さな破片となっている。歯牙については、歯冠のみが残るものや破損箇所が歯根の一部にとどまるものがある。

これら同定できる骨は頭部のみの骨であり、体幹の骨や腕や脚の骨は確認できない。また、遺存する骨には重複する部分がないため、少なくとも1体分の人骨が残存している。

2) 残存状況

頭蓋骨の頭蓋冠と同定できる1、2cm四方の破片が数十点残存している。大部分の頭蓋骨の破片には詳細な部位を同定できるものが少なく、かろうじて側頭骨の錐体の一部が残存するのを確認できる。いずれも小さな破片で、頭蓋冠の縫合線を確認できるものがなく、死亡時の年齢を推定できるような部位はない。

下顎骨は、下顎体の2、3cmほどの断片が数点残っている。オトガイ部分から左右の小白歯の歯槽部分までが残存している。

歯牙は、合計で24本同定でき、歯式は以下のようになる。確認できない歯は8本で、上顎骨では右第3大臼歯と左側切歯、下顎骨では右側切歯と第1、第2小臼歯、左第1小白歯から第1大臼歯である。残存する歯は、いずれも歯冠が残っていて保存状態がよく、歯根も残るもののが数点ある。また、部位は不明であるが、一根歯の歯根が1点残っている。切歯から犬歯までは、歯冠に歯石が付着しており、特に切歯で多く着いているのを確認できる。また、歯の磨り減り方にについて、右切歯の上下とともに切縁の中央部分が両端よりもよく磨り減っており、咀嚼以外の使い方をしていた可能性がある。

<歯式>

上顎右								上顎左							
M2	M1	P2	P1	C	I2	I1		I1		C	P1	P2	M1	M2	M3
M3	M2	M1		C	I1			I1	I2	C			M2	M3	
下顎右								下顎左							

I1：中切歯、I2：側切歯、C：犬歯、P：小白歯、M：大臼歯

3) 性別・死亡年齢

性別は判別できる部位が遺存していないことから不明である。

死亡時の年齢は、歯の咬耗状態から判断することが可能である。まず、第3大臼歯が既に萌出し、咬頭の一部にエナメル質の弱い咬耗が認められることから成人に達した人の歯であることが分かる。さらに、切歯や犬歯、第1大臼歯において象牙質が面状に露呈していて咬耗が進んでいるが、他の歯においてはエナメル質の咬耗にとどまっている。歯によって咬耗の進行状況に差が認められる。現代人の歯を使って咬耗の程度と年齢の相関を調べた柄原（1957）を参考にして、出土歯の咬耗状態から年齢を推定すると、咬耗の進んでいる切歯などでは40歳代の熟年前半、咬耗の弱いものは20歳代の壮年前半あたりとなる。さらに、柄原

(1957) の計算式を使って歯の咬耗状態から死亡時の年齢を推定すると30歳代以上の範囲となる。よって、比較的咬耗が良く進んでいる歯を咀嚼以外のことについても考慮して、歯の咬耗度から死亡時の年齢を推定すると壮年（25歳～40歳）と考える。

ところで、歯の咬耗の程度を上顎と下顎の歯で比較すると、大きな差はなく良く似ていることから同一人物の上下の歯であると考えて矛盾はない。

4) 病変

下顎右第1大臼歯の近位および遠位の隣接面に齲歯が認められる。歯冠部分に大きな孔が開いている。他に齲歯は確認できず、骨にも病変等は認められない。

5) まとめ

頭蓋骨、下顎骨、歯牙が残存しており、これら以外の骨は確認できなかった。また、上下の歯の遺存状態、咬耗状態から判断して、同一人物の頭蓋骨と下顎骨と考えられ、少なくとも1体分の人の遺骨が遺存する。性別は不明であるが、死亡時の年齢は壮年（25歳～40歳）と推定できる。

引用文献

柄厚 博 1957 日本人歯牙の咬耗に関する研究。熊本医学会雑誌。31:607-656.

上顎	近遠心径		頬舌径		下顎	近遠心径		頬舌径	
	右	左	右	左		右	左	右	左
11	8.0	8.6	7.4	7.4	11	5.6	5.7	5.8	6.1
12	7.4	—	6.7	—	12	—	5.7	—	6.2
C	8.1	8.0	8.8	8.8	C	6.9	6.8	7.5	7.9
P1	7.7	7.7	9.5	9.4	P1	—	—	—	—
P2	7.2	7.0	9.0	9.3	P2	—	—	—	—
M1	10.4	10.5	11.3	11.5	M1	(10.9)	—	11.0	—
M2	9.9	10.0	11.3	11.2	M2	11.0	11.0	10.3	10.0
M3	—	8.8	—	11.2	M3	10.1	10.0	9.9	10.4

表1 歯冠計測値 (mm) () は概測値、—は遺存しない

第4章 まとめ

今回の調査においては、近代以降の搅乱などによって削平されていたものの13世紀から近世後半にかけての10面におよぶ遺構面と多量の遺物が確認された。兵庫津遺跡において調査が実施されるたびに感歎されるこの遺構や遺物の多さは、「都市遺跡」での営まれた人々の暮らしの多様性について窺わせるものである。

最後に主な遺構面において概観し気付いたことを書き留めて本書のまとめとしたい。

第1遺構面では、地下蔵SX101が検出された。遺物や切り合い、埋土の状況などから遺構面もなかでも比較的新しいと考えられるが、切石積みの壁や底面を礎敷きした上に板を貼った丁寧な造りは富裕な商家に伴うものであろう。一帯は幕末まで、兵庫津を代表する豪商である北風莊右衛門家が本拠を置いた場所で、江戸時代後期の水帳絵図にでは調査地内の殆どが北風家の所有となっている。ほかにも有力な商家が集中していたとされており、このことを裏付けるようである。

第2遺構面においては、大規模な火災層が検出され、周辺の調査で確認されている宝永5（1708）年の「宝永の大火」と考えられる。火災後の片付けに伴う廃棄土坑が今回も検出されているが選別が行われたのか殆ど瓦のみが投棄されており隣接の第14次調査のように多量の陶磁器類が共伴することはなかった。

焼土層の下で検出された町屋群について特記すべきは、大型の礎石を粘土で被覆した構造もつ建物SB202で、構造から住居というより蔵の可能性が高い。逆にそれ以外の町屋建物は明確でなく、遺物の出土も多くなかった。これは調査対象部分が、街路に主屋を取り付くという建物配置からすると屋敷地の中ほどから後ろ側の、いわゆる「裏」の部分になるためと考えられる。

第3遺構面においては、炭化物の含まれる土坑がいくつか検出された。またSK301から出土している多量の土錘は、海辺の遺跡でもあることを彷彿とさせる。他にも土錘は整地時に混ぜ込まれたようで部分的に多量に含まれる箇所があった。SX303・SX304については、同様の玉砂利を敷いた遺構が第14次調査においても確認されている。

第4遺構面では礎石は殆どが調査区の南から5mほどの範囲で存在しており、おそらくこのラインが町屋建物の北端を示すと思われる。また、これより北には何重にも切り合う土坑群が掘られている。屋敷地の裏手に設けられたゴミ穴のような施設が考えられる。

第5遺構面においては、五輪塔を礎石に転用したSB501が検出された。同面から出土した墨書き土器には「ふんごの國」（豊後国）など瀬内航路の地名がみられ興味深い。

第6遺構面は、出土遺物から第14次調査第5遺構面に相当ようであるが、この面において検出されたSK602では、唐津焼と中国の景德鎮、漳州窯の青花が出土しており17世紀初頭の一括資料として貴重である。

第7および8面において検出されたSB701やSB803などのバラス敷きの礎石建物は、すぐ北の第14次調査地の第6遺構面でも同様の構造をもつものが確認されており時期的にも齟齬をきたさない。位置的にも10数mしか離れておらず一連の倉庫群として捉えることができよう。

さらに、第8遺構面において検出したSX801やSX802のような焦石遺構についても、土蔵などの石敷基礎と考えられる。類似の遺構については、博多遺跡群などで確認されている。

第9遺構面において検出されたSK903は、埋甕の中に多量の土師器皿を入れたもので16世紀以前の兵庫津遺跡でみられる土師器の集積遺構の一つと考えられる。

第10遺構面の礎石列や埋甕遺構は、ほとんど砂質の堆積の上で確認されており、このような基盤の状態でも生活面が築かれていたことの証明といえよう。

今後、関連する資料の蓄積によってこれらの遺構の時期や性格について明らかにしていきたい。

付表 遺物観察表①

器種	底土	色調 (外:外面/内:内面)	備考	器種	底土	色調 (外:外面/内:内面)	備考
1 地下磁器、漆器 糠漆		釉裏:透明白と共復 胎土:淡白色	共復の発色が悪く黒灰色 コンニャック印刷	34 磁器、皿 糠密		釉裏:綠青色 胎土:淡白色	中国産 高台内底胎
2 脚口、皿 糠密		釉裏:白色 胎土:白色	白角船	35 磁戸、坏 糠密		釉裏:淡青灰 胎土:淡褐色	灰釉 内面に灰の反乳頭 底部外間に輪トチの痕跡
3 土師器、皿 0.5cmの長石を含む				36 磁戸、皿 糠密		釉裏:淡青黄色 胎土:淡灰白色	灰釉 内面に灰の反乳頭 底部外間に輪トチの痕跡
4 肥前磁器、漆器 精密		釉裏:透明白と共復 胎土:淡白色	高台壇形に移付着	37 上器器、皿 0.2cm以下の白色粉 を少量含む		外:淡乳黃褐色 内:淡乳黃褐色	輪脚十筋型 高脚盤記印に外にスス付着
5 北佐渡漆、漆器 糠密		釉裏:桔茶褐色 胎土:桔茶褐色	此鉢脚	38 上器器、皿 糠密		外:淡青褐色 内:淡青褐色	内外面に墨書き
6 丹波、糠体 1mm以下の長石を 含む		胎土:桔茶褐色		39 磁戸、天日茶碗 糠密		釉裏:深褐色 胎土:深褐色	天日船
7 十輪器、焼器 クサリ繩子干含む		外:灰赤褐色 内:桔茶褐色		40 唐津、皿 糠密		釉裏:淡灰白色 胎土:淡灰白色	底部高台内に墨書き 胎土1脚跡3ヶ所確認
8 土器器、焰燒 クサリ繩子干含む		外:淡灰褐色 内:淡灰褐色		41 唐津、皿 糠密		釉裏:深褐色 胎土:淡褐色	灰釉 並葉高台内に墨書き 内面に胎土1脚跡3ヶ所あり
9 土器器、皿 クサリ繩子干含む		外:淡黄褐色 内:淡黄褐色		42 五輪塔(風險) 花崗岩			空中重量88.66kg
10 丹波、火入れ 2mm以下の長石を 含む		外:淡赤褐色 内:赤褐色		43 五輪塔(風險) 花崗岩			空中重量37.3kg
11 土器器、削器 0.3mm以下の長石、 石英を多く含む		胎土:淡水褐色 内面に墨書き	外面に墨書き 胎土全量に軽用?	44 瓦貢、茶釜 糠密		外:暗灰色 内:淡茶褐色	ミニチュア 修院に墨書き
12 土器器、皿 糠密		胎土:淡白褐色	内面に墨書き	45 唐津、皿 0.1mm以下の白色粉 を少量含む		釉裏:灰白色 胎土:茶褐色	裏面灰 内面に3ヶ所移付跡あり
13 磁器、皿 胎土		釉裏:灰褐色 胎土:淡黃褐色	外底部高台内に墨書き 内面に胎土目跡4ヶ所あり	46 陶器、皿 0.3mm以下の長石が 少量化		釉裏:乳白色 胎土:淡褐色	長石斑に共葉 高台付底 外底部 ピンホール多数
14 磁器、皿 少量の0.3mm以下の 長石を含む		釉裏:暗褐色 胎土:淡茶褐色	鐵紋	47 土器器、皿 1mm以下の長石、 石英を多く含む		内:淡青褐色 外:淡乳黃褐色	
15 肥前器、碗 糠密		釉裏:乳白色 胎土:白色	朱竹以外砂地	48 土器器、皿 1mm以下の長石を 多く含む		1mm以下の長石を 多く含む	
16 陶器、小鉢 0.5mm以下の 長石、石英を含む		釉裏:深灰褐色 胎土:淡乳黃褐色	寅いらば状の触	49 陶器、糠体 2mm以下の長石を 多く含む		外:茶褐色 内:茶褐色	裏地小明
17 上器器、皿 糠密		胎土:淡乳黃褐色	糠帽上器器 其底端部にスス付着	50 丹波、糠體 0.1~5mmの長石を 多く含む		外:淡乳黃褐色 内:淡茶褐色	
18 磁器、片口小鉢 糠密		釉裏:暗褐色 胎土:淡白色		51 丹波、糠體 3mm以下の長石を 多く含む		外:淡茶褐色 内:暗茶褐色	
19 東野、春炉 七ヶ土		釉裏:乳白色 胎土:淡乳黃褐色	内面にスス付着	52 唐津、皿 1mm以下の長石を 少量化		外:暗茶褐色 内:淡赤褐色	灰釉 月の落高台
20 唐津、皿 良石を多く含む		釉裏:緑色 胎土:淡乳黃褐色	内面に胎土目跡4ヶ所あり	53 磁戸、瓶 0.1mm以下の白色粉 を含む		釉裏:暗褐色 胎土:淡褐色	灰釉
21 陶器、小鉢 糠密		釉裏:暗褐色 胎土:淡乳黃褐色	内面底部に墨書き 胎動の目高台	54 土器器、皿 やや粗		外:褐灰色 内:褐灰色	外面に折鉢明確
22 十輪器、焰燒 糠密		胎土:外表面 黑褐色 内面 淡青褐色	外面部内底部にスス付着	55 丹波、糠體 3mm以下の砂粒を 非常に多く含む		外:淡赤茶褐色 内:淡茶褐色	ヘラ縁き月
23 瓦貢、火鉢 糠密		胎土:黑褐色		56 巴文軒丸瓦 1mm前後の砂粒を 多く含む		外:内: 黑灰色 胎: 灰色	
24 丹波?、甕 2mm以下の長石を 含む		胎土:外表面 茶褐色 内面 淡茶褐色	淡緋め	57 唐草文軒平瓦 大粒の砂粒が多く含む		外:内: 白灰~黑灰 色胎土:灰色	
25 唐津、皿 糠密		釉裏:淡茶褐色 胎土:淡褐色	内面は灰褐色 外面は美濃 日野目(日野) 2瓶、外開 3ヶ所	58 陶器、瓶 微小さな砂粒を少量化 含む。		外:淡茶褐色 内:暗褐色	肩部に横描文 產地不明
26 唐津、皿 糠密		釉裏:深茶褐色 胎土:淡褐色	灰動 内面 3ヶ所、高台 3ヶ所に移付跡	59 上器器、皿 0.5mm以下の白色粉 を多く含む		外:淡褐色 内:淡褐色	
27 和歌伊万里、 奈付皿 糠密		釉裏:淡白褐色に淡乳頭 胎土:白色	高台壇形に移付着 蓋付以外砂地	60 上器器、皿 0.3mm以下の長石を 多く含む。砂粒多い。		外:淡褐色 内:淡褐色	底立は崩れし、甚かな調査は不規 内外面は不規則でガラス付着の 痕跡の有無が見る所あり
28 丹波、 舞花火入れ 0.5mm以下の砂粒を 多く含む		釉裏:淡褐色 胎土:淡茶褐色	灰釉	61 上器器、皿 2mm以下の砂粒(石英、 長石多い)を含む。3mm 以上では砂粒が多い。		外:淡黑褐色 内:淡褐色	外面にスス付着のため黒 灰色、内面一部黒灰色
29 丹波、糠體 0.8mm以下の砂粒を 多く含む		胎土:外表面 暗茶褐色 内面 淡褐色		62 十輪器、皿 0.7mm以下の砂粒 を多く含む。		外:淡褐色 内:淡褐色	外面一部に燒成を受け黑 褐色
30 須佐佐津、推詠 糠密		釉裏:桔茶褐色 胎土:淡乳白色	絆鉢底摩孔?	63 上器器、皿 砂粒、カサリ繩子 を含む		外:淡灰褐色 内:明灰褐色	
31 唐津、鉢 糠密		胎土:暗褐色 胎土:桔茶褐色	鉢絆に透明難	64 上器器、皿 標識な白色粒、全 蓋付を含む。		外:淡褐色 内:淡褐色	
32 伊那磁器、 漆器輪花盆 糠密		釉裏:灰白色 胎土:白色	高台壇形に移付着 與裏が灰褐色	65 土器器、皿 0.5mm以下の砂粒 (長石多い)を含む。		外:淡褐色 内:淡褐色	層滅し、隠弊小明
33 磁器、小鉢 糠密		胎土:桔茶褐色	燒薄め				

付表 遺物観察表②

器種	断土	色調 (外・裏面/内・裏面)	備考
66 備前・壺	0.3mm以下の石英、長石を多く含む。	外:赤褐色 内:赤褐色	
67 土器部・燒塗壺	0.2mm以下の長石を多く含む。	外:赤褐色 内:赤褐色	
68 瓢箪器・鉢	0.8mm以下の長石を多いに含む。	外:灰褐色 内:灰褐色	
69 備前・小壺	1mm以下の石英、長石を多く含む。	外:赤褐色 内:赤褐色	
70 備前・楕球	5mm以下の砂粒を多く含み、長石が多い。	外:赤褐色 内:赤褐色	
71 備前・撲拂	4mm以下の砂粒を多く含む。	外:赤褐色 内:赤褐色	
72 五輪塔(空籠) 花崗岩		中重量8.7kg	
73 石臼	花崗岩		
74 唐津・皿	0.5mm以下の砂粒を含む。精密	釉薬:淡茶灰褐色 胎土:暗褐色	
75 唐津・皿	0.3mm以下の白色砂を少量含む。精粗	釉薬:暗褐色 胎土:暗褐色	内面に2ヶ所胎土跡。
76 唐津・皿	0.5mm以下の白色砂を少量含む。精粗	釉薬:淡綠灰褐色 胎土:淡黃褐色	底面 内面に胎土白帯跡。月の輪高台4ヶ所。
77 唐津・皿	0.5mm以下の白色砂を微量含む。精良	釉薬:淡茶灰褐色 胎土:暗黃褐色	底面 在胎土跡に胎土白帯4ヶ所。
78 唐津・皿	0.2mm以下の白色砂を少量含む。精粗	釉薬:淡綠灰褐色 胎土:淡黃褐色	底面 内面に胎土白帯跡。4ヶ所。平底
79 唐津・皿	0.2mm以下の白色砂を微量含む。精粗	釉薬:淡黃褐色 胎土:赤褐色	底面 内面に2ヶ所折十目を確認。月の輪高台
80 唐津・皿	0.1mm以下の砂粒を含む。精良	釉薬:暗褐色 胎土:淡黃褐色	底面? ? 月の輪高台
81 唐津・皿	0.8mm以下の白色砂を微量含む。精良	釉薬:灰褐色 胎土:黃褐色	裏火候? ? 月の輪高台
82 唐津・皿	1mm以下の白色砂を微量含む。精密	釉薬:灰褐色 胎土:淡黃褐色	底面 在胎土跡に胎土白帯跡。4ヶ所。外側に3ヶ所の折十目があり。月の輪高台
83 唐津・皿	0.3mm程度の白色砂を少量含む。精良	釉薬:淡茶灰褐色 胎土:赤褐色	底面 在胎土跡に胎土白帯跡。4ヶ所。外側に3ヶ所の折十目。月の輪高台
84 唐津・皿	0.2mm以下の白色砂を少量含む。精粗	釉薬:灰褐色 胎土:淡黃褐色	底面 在胎土跡。外側に4ヶ所の砂跡。
85 絵唐津・皿	0.1mm以下の白色砂を含む。精粗	釉薬:灰褐色 胎土:淡黃褐色	絵绘に透写。月の輪高台。内面に3ヶ所胎土跡。月の輪高台
86 絵唐津・皿	0.5mm以下の砂粒を少量含む。精良	釉薬:灰褐色 胎土:淡茶灰褐色	絵绘に透写。月の輪高台。内面に3ヶ所胎土跡と目印。月の輪高台
87 唐津・片口小鉢	0.1mm以下の砂粒を少量含む。精粗	釉薬:淡茶灰褐色 胎土:淡黃褐色	底面 内面に3ヶ所折十目。片口用月の輪高台。
88 唐津・皿	0.5mm程度の白色砂を少量含む。精良	釉薬:淡茶灰褐色 胎土:淡黃褐色	底面 内面5ヶ所。外側5ヶ所の砂跡。
89 青花器物・碗	精密	底面:暗褐色 釉薬:白色	刺繡
90 青花器物・碗	精密	底面:青褐色 釉薬:白色	彰州窯
91 青花器物・碗	精良	底面:青褐色 釉薬:淡褐色	彰州窯 見込み群「青」高台 參考者 高台内面が膨れる。
92 青末・瓶	0.5mm以下の白色砂を少量含む。精良	釉薬:淡茶灰褐色 胎土:淡茶灰褐色	底面 中央に大きな砂跡。月の輪高台。
93 唐津・瓶	0.3mm以下の白色砂を少々含む。精良	釉薬:淡茶灰褐色 胎土:赤褐色	底面 目詰なし。月の輪高台
94 「十師器」・皿	1~3mmの砂粒を3mm以下の白色砂を多く含む。精良	外:淡褐色 内:淡褐色	内面に少しスズ付着
95 上師器・皿	0.1mm以下の砂粒、微小な空洞を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内面に僅かにスズ付着
96 上師器・皿	2~3mmの砂粒を比較的多く0.5mm以下の長石、石英を多く含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	手づくね形態 外面にスズ付着、内面にややスズ付着
97 上師器・皿	0.5mm以下の長石、石英を多く含む。	外:褐色 内:褐色	内面にスズ付着

器種	胎土	色調 (外・裏面/内・裏面)	備考
98 十師器・皿	0.3mm以下の白色砂を含む。	外:褐色 内:褐色	内外面にややスズ付着
99 十師器・焼焼	0.1cm以下の白色砂を多く含む。	外:黑色 内:褐色	外面にスズ付着
100 唐津・小鉢	0.3mm以下の長石を少々含む。	釉薬:灰色 胎土:茶褐色	底部高台部分に3ヶ所の砂目跡 月の輪高台 淡褐色
101 土師器・皿	精密	外:淡灰乳色 内:淡灰乳色	上面被覆粘土、バラス層出土。
102 土師器・皿	0.2mm前の砂粒を含む。	外:淡黃灰褐色 内:淡黃灰褐色	底部高台層出土。
103 土師器・瓶	やや粗	外:淡褐赤色 内:淡褐赤色	底面被覆粘土。
104 青磁・皿	精密	胎土:淡綠色 胎土:羽尾色	バラス層出土。
105 鍋	0.2mm前後の砂粒を多く含む。	外:黑褐色 内:黑褐色	拔水の工具によるテテ
106 備前・片口壺	精密	外:赤褐色 内:赤褐色	
107 烧煮・焼鉢	1mm以下の長石を含む。	外:赤褐色 内:暗褐色	
108 青磁器・碗	精密	胎土:淡綠青色 胎土:灰白色	黄入多款入
109 小師器・皿	やや粗	外:淡黃灰褐色 内:淡黃灰褐色	
110 上師器・皿	精密	外:黃灰褐色 内:黃灰褐色	
111 瓦質・皿	3mm以下の砂粒を含む。やや粗	外:黑色 内:黑灰色	
112 土師器・羽釜	0.2~1mm砂粒を多く含む。	外:赤褐色 内:赤褐色	
113 土師器・皿	0.5~1mm砂粒を多く含む。1~3mm砂粒を含む。	外:淡黃灰褐色 内:淡黃灰褐色	
114 土師器・焼壺	微細な白色色を多く含む。	外:黑褐色 内:黑褐色	
115 備前・甕	1~2mmの長石粒を含む。	外:暗褐色 内:褐色 胎土:淡褐赤色	
116 白磁・皿	精密	胎土:白色 胎土:白色土	底部内面、高台付近の一帯に沙粒付着 中国産
117 青磁・皿	精密	胎土:灰褐色 胎土:淡灰紫褐色	觀音窟
118 巴文軒丸丸	人筋の砂粒多く含む。	外:内:灰白~淡灰 色砂土:白色	横方向のコビキ肌。右巴
119 十師器・皿	長石、石英を若干含む。	外:淡黃褐色 内:淡褐褐色	洗る
120 上師器・皿	0.2mmの砂粒を多く含む。0.5mmの砂粒を含む。	外:灰褐色 内:灰褐色	
121 土師器・皿	やや粗	外:淡褐赤色 内:淡灰赤色	
122 土師器・皿	長石、石英を含む。	外:淡黃灰褐色 内:淡黃灰褐色	
123 青磁・杯	精密	胎土:淡綠色 胎土:淡茶灰褐色	底部疊村から高台内無粒
124 青磁・杯	精密	胎土:淡綠色 胎土:淡茶灰褐色	底部疊村から高台内無粒
125 備前・捕体	やや粗	内:暗褐色 胎土:暗褐色	
126 上師器・鍋	0.2~1mmの砂粒を含む。	外:深褐色 内:深褐色	
127 土師器・皿	1mm前後の砂粒を含む。	外:赤褐色 内:赤褐色	
128 土師器・皿	1mm前後の砂粒を含む。	外:淡黃褐色 内:淡黃褐色	
129 白磁・皿	精密	胎土:白色 胎土:灰白色	底部高台内に墨跡 内面に胎土目跡4ヶ所

付表 遺物観察表③

器種	胎土	色調 (外:外面/内:内面)	備考	器種	胎土	色調 (外:外面/内:内面)	備考
130 青磁・皿	精滑	釉薬:淡青灰褐色 胎土:暗灰白色	武部置付から高台内無釉	163 土師器・皿	2cm以下の長石、 石英を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付滑痕跡。
131 白磁・皿	精密	釉薬:白色 胎土:白色		164 土師器・皿	0.3m以下の長石、 石英を少量含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面に僅かにスス付。外面 基部が微度を含む。
132 青磁・碗	精良	釉薬:淡青色 胎土:淡灰白色	高台置付無釉 瓢箪窯?	165 備前・甕	0.5m以下の長石 を多く含む。	外:茶褐色 内:淡褐色	底部にヒックがある
133 青磁・碗	精良	釉薬:淡青色 胎土:淡灰白色	高州窯?	166 丸貯・羽釜	0.8m以下の長石 を少量含む。	外:黒褐色 内:淡褐色	
134 十字器・皿	白色板、金笠唇の 微縮粒を含む。	外:褐色 内:褐色	内外面に少飛ス付着	167 十字器・皿	やや粗	外:暗赤褐色 内:暗褐色	
135 上師器・皿	クサリ繩合む	外:淡褐色 内:淡褐色	金部外間に棒状の工具の 圧痕	168 十字器・皿	1mm以下の長石、 石英を少量含む。	外:暗褐色 内:暗褐色	内外面にスス付兼し黒褐色。
136 右鍵				169 土師器・皿	3mm以下の石英を 少量含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面の一部にスス付着
137 土師器・皿	1~2mmの砂粒を 若干含む。	外:淡青灰褐色 内:淡灰褐色		170 土師器・皿	0.5m以下の長石、微 小な金星を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内面に微小のスス付着
138 土師器・皿	やや粗	外:淡灰褐色 内:淡褐色		171 土師器・皿	0.5mm以下の長石、 金星を含む。	外:褐色 内:褐色	内外面にスス付着
139 土師器・皿	やや粗	外:淡褐色 内:淡褐色	外面にスス付着	172 土師器・皿	2mm大的砂粒を若 十含む。	外:褐色 内:褐色	
140 土師器・皿	やや粗	外:暗灰白色 内:暗灰白色		173 土師器・皿	やや粗	外:模灰褐色 内:模灰褐色	
141 十字器・皿	0.3mm以下の長石、 金星母を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付兼し黒 褐色が少し残る。	174 土師器・皿	やや粗	外:淡墨黃褐色 内:淡墨黃褐色	
142 土師器・皿	0.2mm以下の白色 粒を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付着	175 十字器・皿	やや粗	外:暗褐色 内:暗褐色	
143 土師器・皿	0.8mm以下の砂粒、 金星母を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	外:表面にわらス付着 内面一 石、金星母を含む。	176 十字器・皿	やや粗	外:淡青灰褐色 内:淡青灰褐色	
144 上師器・皿	0.5mm以下の長石、 石英を少量含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付着	177 土師器・皿	0.2~1mmの砂粒を 含む。	外:模灰褐色 内:模灰褐色	
145 土師器・皿	0.7mm以下の砂粒 を多く含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	外面部一部に微底を受け崩 灰褐色	178 土師器・皿	やや粗	外:淡青灰褐色 内:淡青灰褐色	
146 土師器・皿	0.3mm以下の長石 を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にややス付着	179 土師器・皿	0.2mm前後の砂粒 を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	
147 土師器・皿	0.1mm以下の白色 粒をやや含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付着 外葉一 石に微底を受けて赤褐色となる。	180 土師器・皿	やや粗	外:黄灰褐色 内:淡灰褐色	
148 土師器・皿	1mm以下の長石、 石英を少量含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付着 外葉一 石に微底を受けて赤褐色となる。	181 土師器・皿	クサリ繩合む	外:模灰褐色 内:模灰褐色	
149 十字器・皿	1mm程度の長石、 石英を少量含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付着	182 十字器・皿	やや粗	外:模灰褐色 内:模灰褐色	
150 十字器・皿	0.1mm以下の砂粒、 金星母を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にややス付着	183 十字器・皿	0.5mm以下の長石、微 小な金星母を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内面に微小のスス付着
151 上師器・皿	0.2mm以下の長石 を多く含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付着痕跡	184 七輪		外:灰褐色 内:灰褐色	帶石
152 土師器・皿	0.1mm以下の砂粒 を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色		185 白磁・小皿	精密	外:淡褐色 内:淡褐色	山根部灰輪
153 土師器・皿	0.5mm以下の長石を 少量含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付着 外葉一 石に微底を受けて赤褐色となる。	186 白磁・小皿		白磁: 淡褐色 胎土: 淡白色	山根部灰輪
154 土師器・皿	微細な金星母(矢張り) 金星母を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付着痕跡	187 青磁・皿	精密	胎麁: 淡褐色 胎土: 淡白色	見込み部鉢の日輪刷毛
155 十字器・皿	1mm以下の長石、 石英を多く含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付着	188 土師器・皿	1mmの花崗岩+砂利 0.5mm以下の長石、金星 母を少量含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	外葉に十に内面にもスス 付着 外葉底座を受けて 赤褐色となる。
156 上師器・皿	0.5mm以下の長石、 石英を少量含む。	外:淡青褐色 内:淡青褐色	内外面にスス付着 外葉一 石に微底を受けて赤褐色となる。	189 土師器・皿	0.5mm以下の白色粒 を多く含む。微細な 金星母を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	
157 上師器・皿	0.3mm以下の白色 砂粒を含む。	外:淡青褐色 内:淡青褐色	内外面にスス付着 外葉一 石に微底を受けて赤褐色となる。	190 土師器・皿	1~2mmの砂粒を少 量含む。0.5mm以下の 長石と多量含む。 微細な金星母を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	
158 土師器・皿	0.5mm以下の長石、 石英を少量含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付着	191 十字器・皿	1~2mmの砂粒、0.5m 以下の長石、金石を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	外葉一部に微底を受け崩 灰褐色
159 土師器・皿	0.2mm以下の白色 粒を少量含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付着痕跡、 痕跡	192 十字器・皿	3mmの長石を少 量含む。1mm以下の 長石と少量含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	
160 土師器・皿	0.5mm以下の長石、 石英を少量含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面にスス付着。	193 土師器・皿	1.5mm以下の石英、 長石を少量含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面に多量にスス付着 痕跡
161 土師器・皿	0.3mm以下の長石 を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面に僅かなスス付着 痕跡。				
162 土師器・皿	1~1.5mmの長石を含む。	外:淡褐色 内:淡褐色	内外面に僅かなスス付着 痕跡。				

付表 遺物観察表④

器種	胎土	色調 (外:外面/内:内面)	備考
191 土師器・皿	0.3mm以下の白色 粉、金墨を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着 外面部に赤褐色となる。
195 土師器・皿	0.3mm以下の石灰、 瓦石を多く含む。 微細な金墨を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	
196 十字器・皿	0.5mm以下の石灰、瓦 石を多く含む。 微細な金墨を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面の一部にスス付着 痕跡
197 十字器・皿	0.5mm以下の石灰を 含む。	外: 淡黄褐色 内: 淡黄褐色	
198 十字器・皿	0.2mm以下の白色 粉を少々含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着
199 十字器・皿	0.3mm以下の白灰、長 石を含む。 微細な金墨を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	
200 土師器・皿	1mm以下の砂粒(白 色多い)を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着
201 土師器・皿	0.2mm以下の砂粒を 含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	
202 土師器・皿	0.3mm以下の砂粒を多く 含む。(白色が多い)	外: 淡黄褐色 内: 淡黄褐色	
203 土師器・皿	1mm以下の砂粒を多く (白石多い)	外: 淡褐色 内: 淡褐色	
204 土師器・皿	0.2mm以下の砂粒を 含む。	外: 灰褐色 内: 灰褐色	
205 青花磁器・器 精密	乳頭、暗青色 繪葉	中中国	
206 十字器・皿	1mm以下の石灰、石英、 微細な金墨を含む。	外: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	内外面に多量にスス付着
207 十字器・皿	1mm以下の砂粒を多く (白色が多い)	外: 淡褐色 内: 淡褐色	
208 上師器・皿	1mm以下の砂粒を多く 含む。(長石多い)	外: 淡褐色 内: 淡褐色	
209 上師器・皿	1mm以下の長石を 多く含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着
210 備前・甕	1mm以下の長石を 多く含む。	外: 暗褐色 内: 茶黃褐色	
211 土師器・皿	やや粗		
212 石鍋	銀灰色	滑石	
213 十字器・皿	1~2mmの砂粒を 多く含む。	外: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	
214 亂連器・碗 精密	暗灰褐色	产地不明	
215 龜山焼・甕	1mm以下の石灰、 石英を多く含む。	外: 淡灰色 内: 淡灰色	龜山焼
216 瓦質・刷毛	やや粗		
217 土師器・皿	0.5mm以下の砂粒を 多く含む。	外: 淡乳黃褐色 内: 淡乳黃褐色	
218 土師器・皿	0.5mm以下の長石を 多く含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	
219 十字器・皿	1mm以下の砂粒を 少々含む。	外: 淡乳黃褐色 内: 淡乳黃褐色	
220 土師器・皿	2mm前後の砂粒、 クサリ砂を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	
221 上師器・皿	1mm以下の石灰、 瓦石を多く含む。	外: 淡乳黃褐色 内: 淡乳黃褐色	
222 土師器・皿	1mm以下の砂粒を 含む。	外: 淡乳黃褐色 内: 淡乳黃褐色	口縁部淡うつ
223 土師器・皿	1.5mm以下の白色 (長石が多い)、金墨 等を含む。蓋	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着
224 上師器・皿	0.5mm以下の白色粒 を少々含む。蓋	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着

器種	胎土	色調 (外:外面/内:内面)	備考
225 土師器・皿	0.3mm以下の長石、微 細な金墨等を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着痕跡あ り
226 土師器・皿	やや粗	外: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	
227 土師器・皿	やや粗	外: 淡赤黃褐色 内: 黄灰褐色	
228 土師器・皿	やや粗	外: 黄赤褐色 内: 黄赤褐色	
229 土師器・皿	やや粗	外: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	
230 土師器・皿	やや粗	外: 淡赤黃褐色 内: 淡赤黃褐色	
231 土師器・皿	やや粗	外: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	
232 土師器・皿	やや粗	外: 灰褐色 内: 灰褐色	
233 十字器・皿	3mm程度の長石1↑ を含む。0.3mm以下の石 灰、長石を多く含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着痕跡あ り
234 十字器・皿	1mm以下の石灰、 長石を多く含む	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着痕跡あり 而して赤褐色となる
235 十字器・皿	1mm程度の長石1↑ を含む。0.3mm以下の石 灰、長石を多く含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着痕跡あ り
236 上師器・皿	1mm以下の石灰、 長石を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着痕跡あ り
237 土師器・皿	0.3mm以下の長石を少 々含む。金墨を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着痕跡あ り
238 土師器・皿	0.1mm以下の白色粒 を少々含む。蓋	外: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	
239 土師器・皿	0.2mm以下の白色粒、 金墨等を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着痕跡あ り
240 土師器・皿	やや粗	外: 淡褐色 内: 淡褐色	
241 土師器・皿	やや粗	外: 淡赤褐色 内: 淡赤褐色	
242 土師器・皿	1mm以下の石灰、長 石、金墨等を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着痕跡あ り
243 上師器・皿	やや粗	外: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	
244 上師器・皿	やや粗	外: 淡赤黃褐色 内: 淡黃褐色	
245 土師器・皿	0.1mm以下の白色 粒を多く含む。蓋	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着痕跡あ り
246 土師器・皿	0.2mm前後の長石、 白灰粒を含む。	外: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	
247 土師器・皿	0.3mm以下の白色粒 を多く含む。蓋	外: 淡褐色 内: 淡褐色	瓦器内部にスス付着黒色とな る。外表面に1~2cmまでスス付 着する。
248 土師器・皿	0.3mm以下の長石2↑ を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	口縁から内外面に3~4cmまでス ス付着した痕跡
249 土師器・皿	やや粗	外: 黄灰褐色 内: 淡褐色	
250 土師器・皿	0.5mm以下の長石、微 細な金墨等を含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	内外面にスス付着痕跡あ り
251 土師器・皿	2~8mmの砂粒含 む。	外: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	
252 土師器・皿	3~5mmの砂粒を 少々含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	
253 土師器・皿	1mm以下の砂粒(主 として白色粒)やや 含む。	外: 淡褐色 内: 淡褐色	

報告書抄録

ふりがな	ひょうごついせきだい53じはっくつちょうさほうこくしょ							
告名	兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書							
削書名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	浅谷誠吾・井尻 格・大藪由実子・内藤俊哉・中村大介・丸山真史							
編者機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL 078-322-6480							
発行年	西暦2012年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
兵庫津遺跡	兵庫県神戸市 兵庫区七宮町 2丁目	28105	4-24	34度 40分 15秒	135度 10分 32秒 ~	2010.10.13 ~ 2011.10.131	250m ²	共同住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
兵庫津遺跡	集落跡	中世～近世		町屋建物、礎石建物、 井戸、石組遺構、 土坑、ピット		陶磁器・土師器・ 土製品・錢貨・ 鉄製品・木製品		
要約								
中世から近世にかけての10面の遺構面を確認した。多数の遺物とともに中世の礎石建物や石敷建物、近世の町屋群などをはじめとする遺構を検出した。特に第2遺構面は、周辺の調査でも確認されている宝永の人火(1708年)の焼土層が検出された。また近世の町屋に伴う埋桶遺構や石組遺構からは魚骨なども出土している。								

兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書

平成24年3月 印刷

平成24年3月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課
〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480

印刷 丸山印刷株式会社
〒676-8566 兵庫県高砂市神爪1丁目11番33号
TEL.079-432-1527

